

日本中東学会ニューズレター

JAMES

NEWSLETTER

No. 121

2010/7/1

目 次

会長挨拶	2
日本中東学会第 16 回公開講演会のお知らせ	4
第 3 回中東研究世界大会 (WOCMES3)	
日本中東学会パネルについて	6
第 8 回アジア中東学会連合大会 (AFMA8) の開催予定	7
「日本における中東イスラーム研究文献データベース」の 統合と連携編集協力	7
第 27 回年次大会の開催について	8
理事会・総会報告	8
細則改正・会員会費特例規程制定について	16
『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告	18
第 2 回日本中東学会奨励賞の授与	19
第 2 回日本中東学会奨励賞を受賞して	20
第 26 回年次大会報告	21
【大会プログラム】	21
【公開シンポジウム】	25
【研究発表会場から】	26
【年次大会託児所会計報告】	42
【大会決算】	42
【大会を終えて】	43
会員の異動	45
寄贈図書	47
事務局より	48
編集後記	49

会長挨拶

第 13 期会長 長沢栄治

会長として一言ご挨拶申し上げます。まず、今回の年次大会の実行に当たり、大変なご努力をいただいている大会実行委員長松田俊道会員、および実行委員の皆様その他関係者の方々に、こころからお礼申し上げます。また、会場のお世話をいただいている中央大学文学部および関係各位に対し感謝の意を表します。

また会長としては、これまでの一年間またこれからの一年間、お世話になる店田廣文事務局長をはじめとする学会事務局スタッフの皆様、早稲田大学イスラーム地域研究機構の貫井万里会員、深見奈緒子会員、岡井宏文会員他事務局スタッフの皆様に対し深く感謝申し上げます。昨年度までは錦田愛子会員のご助力も借りました。本来なら常設の事務局を設置するのが理想ですが、残念ながらそれを可能にする条件が整っていないのが実情です。その結果、膨大で煩瑣な事務作業を皆さんにご無理を申し上げながら、ボランティアの形でお願いしてきております。また、早稲田大学には学会事務室などへの格別の配慮について、この場をお借りして感謝申し上げます。

理事や監事の学会役員の方々には、それぞれご担当の職務で多大のご努力をいただけてきました。また、学会誌『日本中東学会年報(AJAMES)』の青山弘之編集委員長はじめ編集委員会の方々には、その表には現れない献身的ともいえる努力に深く敬意を表します。

本日の大会では、会員と会費に関する会則改正を提案いたしましたがおかげさまでご出席の会員の皆様からご理解をいただきました。まことにありがとうございます。本学会も設立以来、四半世紀を越える年月を数え、会員構成も変化する中で、制度的な整備や見直しが必要な時期にさしかかっています。これから修正を検討しなくてはならない点もいくつか出てくるかと思いますが、よろしく願いいたします。

さて、昨年の大会では会長挨拶の中で、学会の社会的責任について言及いたしました。皆様もご承知のように最近、事業仕分けの第 2 弾がはじまり、マスコミをはじめ社会の関心を再び集めています。そうした中、昨年 11 月には第 1 弾の事業仕分けに対して「長期的視野に立った学術振興政策の必要性に関する会長声明」を出しました。もちろんこれは会長個人というより理事会の総意として策案したものでありますが、その内容は、文部科学省担当の事業である競争的資金に関する大幅な予算縮減(とくに若手研究、外国人特別研究員・研究者招致、女性研究者支援)に対する危惧を表明したものです。

ただし、このような声明を出すことについて、会員の方々の中には、学会として圧力団体まがいのことをしていいものかと、違和感を覚える方もおられるかもしれま

せん。これに関連して申し上げますと、二年ほど前には日本学術振興会カイロ研究連絡センター廃止の動きがあり、理事会レベルで学振本部に見直しの要請をしたこともございました。またさらには、10年以上前になりますが、アジア経済研究所の移転問題に関する大会での決議に関して、私自身がOBとしてお願いしたこともありました。ただし、その際の大会では異論も出された記憶がありますし、判断が難しく、慎重に考えないといけない問題でもあると考えます。とはいえ、今日の社会状況を鑑みると、学会として発言すべきことはしなければならない、あるいは行動を求められている場合が多くなっている点も認識する必要があるかと思えます。

一例として文科省の方針で国立大学附置研究所を「共同利用・共同研究拠点」として申請するプログラムがあり、今年度からスタートしました。私の勤務先の研究所もこの申請をいたしました。その際に「研究者コミュニティ」との関係が重視されるということから、本学会を含めて関係学会にサポートラーを依頼したことがございます。たとえば、そのような形で学会に対する要求も強まっているのは確かであると考えます。

さて、学会の社会的責任をめぐる問題として、このような学会全体の利害に関わる事柄だけではなく、研究者個人の政治的責任と結びつく形で、研究者集団としての学会の責任がますます強く問われている状況も指摘できるように思います。とくに本学会の会員が研究対象とする中東という地域、あるいはイスラームをめぐる問題については、そうした社会的責任が格段と強まっているのは確かです。これまでも学会としては、2000年に始まる第2次インティファダに際して公開シンポジウムを開催し、2001年の米国同時多発テロ、また2003年のイラク問題についても、会長の声明と問題に関する会員投稿を募ったことがあります。連続して開催しております学会主催の公開講演会もその意味で重要な役割を果たしているかと思えます。

第二に申し上げたいのが、学会の外に対する関係ではなく、自分たち自身の問題、研究者コミュニティとしての学会のあり方です。学会設立以来の年月の中で、日本の中東・イスラーム研究には目覚ましい前進が見られました。それはたんにこの分野の研究者の数が増えたということだけでなく、優秀な若手研究者が集まる学問領域となってきたということです。これも私の勤務先の例で、数少ないサンプルであり恐縮ですが、現在、アジア研究を専門とする本研究所で受け入れている日本学術振興会の特別研究員(PD)のうち、中東・イスラーム研究者が半数を占めています。昔は自分自身を含めて変わり者の吹き溜まりであったと言うと同輩先輩に怒られるかもしれませんが、大学の講座や研究科など制度の確立整備も進んだこともあり、中東・イスラーム研究は、今や敏感な知的感性をもつ若い人たちがごく当たり前のように入ってくる研究領域となっているように思います。また、1990年代以降、専門分野に関するさまざまな辞書や入門書が出版され、より入りやすい学問になってきたのも確かなようです。

しかし、同時にそれは中東・イスラーム研究にとって厳しい自己批判の時代が始まっているということの意味でもあります。最近、ある研究会の席上で、ベテランの先生から「講座ができると学問が減じる」ということわざがあるとお聞きしました。立派な名前を付けた講座や学科ができると、その枠組みに安住し、研究内容が墮落するという厳しい格言であります。またそれは、学問の営みに対してたえず自省的であり、流れの淀まないように努力をしなければならないという意味であります。まさにそうした努力のための環境作りこそが、学会の重要な任務ではないかと考えます。

第三に申し上げたいのが国際研究交流のいっそうの促進です。今年は、アジア中東学会連合(AFMA)の定例大会と中東研究世界大会(WOCMES)開催の年であります。すでに個人レベルでは、とくに若手研究者によるそれぞれの国際的な研究活動の展開には目覚ましいものが見られます。ただし、こうした個人の意欲に頼るだけではなく、制度的サポートが必要であり、この点で学会の果たすべき役割は、ますます大きくなっていると思います。おかげさまで本年度は国際交流基金の助成を得て、国際交流担当理事の東長靖理事のご努力もあり、WOCMESに関しては着々と現在、準備が進んでいると聞きます。一方、AFMAに関しましては、アジアでの中東研究のネットワーク作りの意義を再確認し、本学会の積極的な関与が求められる重要な節目の時期にさしかかってきているという認識をもっております。この点で会員からのご助言とご協力を賜りたいと考えております。

学会として取り組むべき問題は、他にも多々あるかと存じますが、風通しの良い組織運営を心がけながら、会員みなさんの参加と自由闊達な議論をふまえ、取り組んでいきたいと思っております。私としては任期の最後の一年となりますが、微力ながら学会の発展に貢献することができればと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

杜の都の講演会

「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム—中東に誕生したアブラハムの宗教」 ～日本中東学会第16回公開講演会のお知らせ～

第16回日本中東学会公開講演会「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム—中東に誕生したアブラハムの宗教」を下記の要領で開催いたします。

皆様のご参加をお待ち申し上げます。また、所属機関等関係先への広報をお願い申し上げます。ポスター(B2判)の送付をご希望の場合には、日本中東学会事務局学会までご連絡ください。

<講演会の趣旨>

冷戦崩壊後、「文明の衝突」という言葉に象徴されるように、西欧のキリスト教世界と中東イスラーム世界の対立が強調されてきました。また、半世紀を過ぎても解

決されないばかりか、ますます深刻化するイスラエル・パレスチナ問題は、ユダヤ教とイスラームとの対立を印象付けてきました。このような状況のなかで日本人の多くは、ユダヤ教・キリスト教・イスラームの三宗教は、共存することが不可能なのではないかと考えたり、これらの「厳格な一神教」は、日本人一般の宗教観とは相いれないではないかと感じたりしてきたのではないのでしょうか。

けれども、こうした「認識」や「印象」は、多くの場合、メディアなどから得た断片的な知識やセンセーショナルな事件報道をもとに形成されたものにすぎません。私たちは、これら三宗教の重要性は知りつつも、それについて学ぶ機会に恵まれてきたとは言えません。今日、世界人口の約54%は、ユダヤ教、キリスト教、イスラームのいずれかの信者であるということを考えるならば、これら三宗教への理解を深めることが、グローバル化する時代を生きる私たちにとっていかに重要であるかは明らかだと思います。

こうした状況を踏まえ、本年度は、日本を代表するユダヤ教、キリスト教、イスラームの専門家の方々をお招きし、これらの宗教についての理解を深める機会を持ちたいと考えました。これらの宗教は、いずれも中東に誕生しています。そして同じ神を信仰し、アブラハムを偉大なる一神教徒として高く評価しています。これら三宗教が「アブラハムの宗教」とも呼ばれる由縁です。また、それにもかからず、三宗教の間には、重要な相違もあります。講演会が、ユダヤ教、キリスト教、イスラームへの理解を深める場になることを願っております。

皆様、どうぞ緑が美しい初夏の仙台にお越しくください。

日時：2010年7月17日(土)13時30分～17時30分(開場13時)

会場：東北大学マルチメディア研究棟 6F ホール(川内北キャンパス)

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41



<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/about/10/about1003/>

仙台駅からのアクセス：

仙台市営バス(約15分)

16番乗り場 広瀬通経由交通公園・川内(営)行／

広瀬通経由交通公園循環 川内郵便局前下車

9番乗り場 宮教大・青葉台行・青葉通経由動物公園循環

東北大川内キャンパス・萩ホール前下車

一般公開・参加費無料

プログラム：

挨拶・趣旨説明 13:30～13:35 長沢栄治

講演1 13:40～14:30 市川裕「ユダヤ教の二つの流れと現在—ダビデとモーセ」

講演2 14:35～15:25 山形孝夫「イサクの犠牲とキリストの十字架」

休憩

講演3 15:55~16:45 小田淑子「イスラームと統治—シャリーアとトルコ共和国の世俗主義」

討論・質疑応答 16:50~17:30 司会：桜井啓子

問い合わせ先：日本中東学会事務局

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 513 番地 早稲田大学 120-4 号館 3 階
早稲田大学イスラーム地域研究機構気付

Tel/Fax: 03-5286-1966

E-mail: james@db3.so-net.ne.jp

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>

(桜井啓子)

第3回中東研究世界大会(WOCMES3)日本中東学会パネルについて

118号、120号のニューズレターでお知らせしたとおり、2010年7月19~24日にバルセロナ(スペイン)で開催される第3回中東研究世界大会(The Third World Congress for Middle Eastern Studies: WOCMES3)に、JAMESとして参加することとなりました。「2つの海の出会うところ—多元的な中東理解を求めて」という総合タイトルのもと、4つのトピックによる5つのパネルを7月19~20日の2日間にわたって組みます。なお本事業は、国際交流基金知的交流会議助成プログラムの援助を受け、NIHUプログラム・イスラーム地域研究および「世界を対象としたニーズ型対応地域研究推進事業：アジアのなかの中東」と連携して進めています。

具体的なパネル名、開催日時等については、下記をご覧ください。

Meeting Place of Two Oceans (Majma‘ al-Baḥrayn):

Multi-dimensional Understanding of Middle East

1. Diversity and Uniformity in the Muslim West 7月19日 14:30~16:30
2. Multiple Identity of the Arab People based on the Results of Recent Poll Survey
7月19日 17:00~10:00
3. Sufis and Saints Facing the Government and the Public-I 7月20日 9:00~11:00
4. Sufis and Saints Facing the Government and the Public-II 7月20日 11:30~13:30
5. How Does One “Oriental” Entity Meet Another?: Reception of Modern Middle Eastern Literature in Japan 7月20日 14:30~16:30

なお、この内第5パネルの成果の一部として、2010年9月4日(土)に早稲田大学小野記念講堂で開催予定の公開講演会「魅惑の中東現代文学」(仮題)を、共同利用・共同研究拠点イスラーム地域研究早稲田大学拠点および京都大学拠点とともに開催する予定です。(東長靖)

第 8 回アジア中東学会連合大会 (AFMA8) の開催予定

2年前の2008年ウランバートルでの大会に続き、本年は北京でアジア中東学連合の第8回大会が開催されます。当初計画された7月開催から延期され、9月後半に開催の予定(18~19日あるいは25~26日)ですが、日程は依然、調整中です。残念ながら、国際交流基金への開催助成申請は通りませんでした。主催学会の中国中東学会側で、日本からの発表者5名分の滞在費を出していただけることになりました(航空運賃など自己負担)。統一テーマは、「中東の安全保障と東アジアの役割」(the Middle East Security and East Asia's Roles)ですが、現代国際政治に限定せず、社会や文化・歴史などの諸側面を論じるということです。日程や詳細は、決まり次第、学会メールでお知らせしますが、ご関心のある方は学会事務局にお問い合わせいただければ、最新の情報をお知らせします。7月末までに、発表者を決定し、連絡することになっています。中国、韓国、モンゴルの専門家・研究者と交流する貴重な機会でありますので、ぜひご参加ください。(長沢栄治)

「日本における中東イスラーム研究文献データベース」の統合と連携編集協力

日本中東学会では、2003年3月末に閉所された財団法人東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センターの「日本における中東イスラーム研究文献データベース」事業を継承し、平成15-16、18年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「日本における中東研究文献データベース1989-2006」、2007年度以降は、NIHUプログラム・イスラーム地域研究東洋文庫拠点事業と連携して、データベースの作成・公開をしてまいりました。

このような経緯から、同種のデータベースが、東洋文庫の蔵書検索サイト【付録】(<http://toyo-bunko.or.jp/>) (旧東洋文庫ユネスコデータ収録、1868-2000)、本学会サイト(<http://www.soc.nii.ac.jp/james/>、1989年以降を対象)、イスラーム地域研究東洋文庫サイト(<http://www.tbias.jp/>)の3箇所において公開されております。本文献データベースは、学生・大学院生・研究者に限らず、中東・イスラーム地域に関心をもつ人々に広く活用されてきました。

イスラーム地域研究東洋文庫拠点では、平成20年度より文部科学省委託事業「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」の拠点強化事業「日本における中東イスラーム研究文献データベース遡及入力事業」(最大5年間の予定)を実施しております。ここでは、2000年以降の文献データについて悉皆調査を行うとともに、最終の24年度までに上記3つのデータベース統合(収録対象:明治初年~2010年、総件数約43,000件)することをめざし、先日開催された学会総会にて、当学会と東洋文庫拠点間でデータ集積において協力関係を結ぶことが承認されました。

本学会のウェブサイトでは、業績のオンライン登録を受け付けております。また、直接電子メールの添付ファイルでの登録や郵送における登録も受け付けております。登録の際の詳細については、学会サイトの「新規データの登録について」のページをご参照ください。2001年にサイトが立ちあげられてから約10年になりますが、その間、電子メールまたはサイトのオンライン登録で業績を登録された件数は、約700件(130人)にのぼります。今後ともご協力をお願い申し上げます。

業績郵送先

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町513番地 早稲田大学120-4号館3階
早稲田大学イスラーム地域研究機構気付 日本中東学会DB編集係
電話・ファックスでの登録および問い合わせ

Tel/Fax: 03-3942-0160(東洋文庫イスラーム地域研究拠点内)

電子メールでの登録および問い合わせ

データベース編集担当：後藤敦子 qfg02050@nifty.com

会員の皆様のご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(小松久男・後藤敦子)

第27回年次大会の開催について

2011年度の日本中東学会第27回年次大会は、5月21日(土)と22日(日)の2日間にわたり、京都大学(時計台のある吉田キャンパス)を会場にして開催されます。実行委員会は同校の教員および同校関係者を中心に、日本中東学会の役員などから構成されます。

会場等の事情から、例年より1週間ほど遅い日程となりました。実行委員会では、土曜日の公開講演会等を、これから力を入れて企画していきたいと思っております。

会員の皆様方には、是非大勢お越しいただきたく存じます。季節のよい5月の京都で皆様とお目にかかるのを楽しみにいたしております。

(第27回年次大会実行委員長 小杉泰)

理事会・総会報告

【2010年度第1回理事会報告】

日時：2010年5月8日(土)

場所：中央大学3号館 3203教室

出席：長沢栄治会長、青山弘之、赤堀雅幸、大稔哲也、加藤博、栗田禎子、黒木英充、
小杉泰、桜井啓子、店田廣文、東長靖、三浦徹、山岸智子

欠席：白杵陽、小松久男、山口昭彦

[議題] (議題の詳細については9～14ページの総会報告もご参照ください)

1. 2009年度事業報告・決算報告を承認した(詳細は総会議事録)。
2. 2010年事業計画・予算案を承認した(詳細は総会議事録)。
3. 『日本中東学会年報(AJAMES)』第26号編集報告を受け、第27号編集計画を承認した(詳細は総会議事録)。
4. 細則改正・会員会費特例規程制定を承認した(詳細は総会議事録)。
5. 国際交流について審議し、その促進を決議した(詳細は総会議事録)。
6. 文献データベースの統合と編纂協力について承認した(詳細は総会議事録)。
7. 2010年度公開講演会開催について承認した(詳細は総会議事録)。
8. 会員動向について報告があった(詳細は総会議事録)。
9. 総会資料を確認した。

【日本中東学会第26回年次総会報告】

日時：2010年5月8日(土) 17:00～18:00

会場：中央大学多摩キャンパス3号館 3115教室

出席：当日出席者74名、委任状提出110名、計184名

(会員数700名、定足数5分の1の140名により、総会成立)

1. 司会および総会役員の選出

清水和裕会員の司会により、議長として三沢伸生会員、書記として北澤義之、近藤久美子両会員、議事録署名人として池田美佐子、大河原知樹両会員を選出した。

2. 2009年度事業報告および決算報告

店田廣文事務局長および各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 事業報告(報告：店田廣文事務局長)

- ・ 第25回年次大会を開催した(2009年5月16日～17日、広島国際会議場と広島市立大学)。
 - ・ 公開講演・公開シンポジウム「暴力と平和を考える—ヒロシマの視点から」
 - ・ 研究発表は、7会場7部会49本(発表者49名)(JAMES-KAMES特設セッション3本を含む)
 - ・ 韓国中東学会から Lee Hee-Soo 韓国中東学会会長と Lee Jong-Hwa 事務局長を招待した。
 - ・ 第25回年次大会にあわせ開催した総会での承認により、学会会則第8条第2項を改正した。
- ・ 日本中東学会年報(AJAMES)第25-1号、第25-2号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。

- ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「学術定期刊行物」の助成を受けた。
- ・ 海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。国立情報学研究所論文情報ナビゲータ(CiNii)上で公開されるよう手配した。
- ・ 第15回公開講演会「中東と中央ユーラシア—資源、民族問題、イスラーム」を、2009年10月24日に、北海道大学学術交流会館において開催した。
- ・ 開催にあたり、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)」の助成を受けた。
- ・ 第2回日本中東学会奨励賞受賞者を選考した。
- ・ ニュースレター和文4回(総頁96頁)を発行した。第117号(5/13、14頁)、第118号(7/24、年次大会特集、46頁)、第119号(10/16、14頁)、第120号(2010/1/28、22頁)。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース1989-2009」(日本語版、英語版)につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ホームページにおいて公開した。
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報を行った。
- ・ 韓国中東学会第19回国際会議に招待を受け、長沢栄治会長、臼杵陽会員が参加し発表を行った。
- ・ 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図るとともに、大稔哲也理事が担当して同協議会の事務局を運営した。
- ・ 地域研究コンソーシアム年次集会に帯谷知可会員が出席した。同集会にあわせて国立民族学博物館内に設置されたポスター・映像コーナーで学会広報のためのポスター展示を行った。
- ・ 要請により、地域研究学会連絡協議会のニュースレター第4号に、地域研究動向および学会活動報告などを寄稿した。
- ・ 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行った。
- ・ 要請により、「日本学術会議・科学者委員会・学術誌問題検討分科会」が実施した学術誌に関するアンケート調査に回答した
- ・ 要請により、日本西アジア考古学会第17回西アジア発掘調査報告会を後援した。
- ・ メディアリサーチセンター発行の「雑誌新聞総かたろぐ2010年版」に掲載されている日本中東学会年報、ニュースレターの刊行情報を更新した。
- ・ 会員の増減：2009年度中には入会者47名、退会者34名(うち逝去による退会1名、会費滞納による退会24名)の異動があった。その結果、2010年3月31日現在の会員数(年度末退会者33名含む)は725名(正会員538名／うち海外在住19名；学生会員187名／うち海外在住4名)となった。

(2) 日本中東学会年報(AJAMES)編集報告(報告：青山弘之編集委員長)

- ・ AJAMES 第 25-1 号、第 25-2 号が無事刊行、発送された。
- ・ 25-1 号は 2005 年 7 月に刊行・発送され、内容は、論文 6、研究ノート 1、研究動向 1、書評 4、博士論文要旨などであった。
- ・ 25-2 号は、2009 年 12 月に刊行・発送され、内容は、論文 1、研究ノート 1、資料紹介 1、書評 3 などであった。

(3) 2009 年度決算報告(報告：店田廣文事務局長)

- ・ 事務局の移転に伴う費用の他は、AJAMES、データベース等の費用は前年度同様であった。

<質疑応答>

- ・ 特になし

<採決> 以上の 2009 年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。

(4) 監査報告(報告：泉淳監事)

- ・ 早稲田大学にて、泉沢久美子監事と 2009 年度予算執行状況について監査を行った結果、2009 年度予算は適正に執行されことを確認した。

<質疑応答>

- ・ 特になし

<採決> 以上の 2009 年度監査報告について、総会はこれを承認した。

3. 2010 年度事業計画および予算

店田廣文事務局長および各担当理事より、総会資料に基づき、2010 年度事業計画および予算案が提案された。

(1) 事業計画一般について(説明：店田廣文事務局長)

- ・ 第 26 回年次大会を、2010 年 5 月 8 日～9 日に、中央大学において開催する。
- ・ 日本中東学会年報(AJAMES)第 26-1 号(2010 年 7 月)、第 26-2 号(2011 年 1 月)の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。
- ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「学術定期刊行物」の助成を受ける。
- ・ 第 16 回公開講演会「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム—中東に誕生したアブラハムの宗教」を 2010 年 7 月 17 日に、東北大学において開催する(詳細については 4～6 ページもご参照ください)。
- ・ 開催にあたり、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公開発表(B)」の助成を受ける。
- ・ ニュースレターを年数回発行する。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2010」(日本語版、英語版)につ

き、東洋文庫との連携事業として、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ホームページにおいて公開する。

- ・ 中東研究文献データベースは3カ所(東洋文庫、日本中東学会、NIHU・イスラーム地域研究東洋文庫拠点)で公開されている。当初、東洋文庫のユネスコ東アジア文化研究センターが行っていたが、同センターの2003年廃止に伴い、それ以降は補遺事業としての活動が行われており、今後は、3カ所の事業の統一に向けて努力が必要となる(詳細については7~8ページもご参照ください)。
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
- ・ 海外の関連学会との交流を促進する。
 - ・ 第26回年次大会に、韓国中東学会から Chang Byung-Ock 元会長、Choi Jin-Young 事務局長を招待する。
 - ・ アジア中東学会連合第8回大会(AFMA8、開催日未定)について、担当の中国中東学会に協力する(詳細については7ページもご参照ください)。
 - ・ 第3回中東研究大会(WOCMES3、7月19~24日)にパネルを派遣する。派遣にあたり、国際交流基金の助成を受ける(詳細については6ページもご参照ください)。
- ・ 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- ・ 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
- ・ 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行う。
- ・ 第3回日本中東学会奨励賞を選考する。
- ・ 第14期役員選挙を実施する。

(2) AJAMES 第26-1号・第26-2号編集計画について(説明：青山弘之編集委員長)
(詳細については18~19ページもご参照ください)

- ・ AJAMES 第26-1号に関しては、2009年12月20日に応募が締め切れ、2010年7月に刊行・発送の予定。投稿原稿は14、再投稿が5。採用原稿は論文4、研究ノート1、書評3、博士論文要旨、特集(英語、総論+論文3)。
- ・ AJAMES26-2号に関しては、2010年6月20日締め切り、2011年1月に刊行・発送の予定。
- ・ 編集体制としては、青山弘之の会員が編集委員長、山口昭彦、山中由里子両会員が副編集長となった。また松本弘、水島多喜男両会員が編集委員を退任、保坂修司、武石礼司両会員が着任、その他の編集委員は留任した。

(3) 2010年度予算案について(説明：店田廣文事務局長)

- ・ 科学研究費補助金2件は昨年度より減額となったが、国際交流基金の助成が得られたことにより、2010年度予算規模は前年度を上回った。
- ・ 支出では、アルバイト謝金が前年度より増額されているが、その背景として昨

年度は事務局の個人的ボランティアに例年よりも頼ったことの反省がある。

<質疑応答> 特になし

<採決> 以上の2009年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

4. 学会細則改正・会員会費特例規程制定(説明:赤堀雅幸財務担当理事)(詳細については16~18ページもご参照ください)

- ・ 海外在住会員へのAJAMES送料負担規定の廃止および会費特例の新設(非常勤職特例)の提案がなされた。
- ・ 会誌送料に関しては、雑誌の性質上、固定した金額も設定しえず、また本来AJAMESの一部とみなすことに問題があるため現行の細則II-2を削除したい。
- ・ 会費特例については、会員の種類を増やし事務手続きの複雑化を招くよりは、特例追加により対応した方がよいとの判断に基づき、「会費の特例」を細則II-2として設けたい。
- ・ 新規の細則II-2に基づき、「日本中東学会会員会費特例規程」を制定し、非常勤職特例を2011年度から認めることとしたい。
- ・ 他学会の例などを参考に、会費特例については次年度以降の総会においても新たな提案を求めることを付言したい。

<質疑応答> 特になし

<採決> 以上の学会細則改正・会員会費特例規程制定について、総会はこれを承認した。

5. 日本中東学会奨励賞授賞式(小杉泰奨励賞審査委員・理事)

AJAMES第22号-2掲載論文により、岩崎えり奈会員が受賞し、授賞理由の紹介、賞状および賞金の授与、受賞の言葉の披露があった(詳細については19~20ページもご参照ください)。

- ・ 本来は昨年度の授賞であったが、選考過程の都合から、授賞式は今年度の大会で実施される。
- ・ AJAMESは若手研究者の国際化促進も兼ねて、外国語による論考投稿を増やす方針であり、これを確保するためにも今後は、より積極的な推薦を評議員に願えるよう制度を整えたい。

6. 会長挨拶(長沢栄治会長)

会長から、年次大会開催校(中央大学)、事務局担当校(早稲田大学)、理事、監事、AJAMES編集委員会等に対する謝辞、故大塚和夫会員への哀悼の意の表明の後、学会の制度改革、社会的責任重視、研究者コミュニティとしての自己点検、国際交流促進の必要に触れつつ挨拶があった(詳細については2~4ページの「会長挨拶」もご参照ください)。

7. 議事終了

・議事終了につき議長が降壇し、司会者により総会の閉会が宣言された。

2009年度決算 本会計

収入	09年度予算	09年度決算
2008年度よりの繰越金	7,288,765	7,288,765
年会費	5,791,000	6,225,000
正・学生会員	5,791,000	6,225,000
2006年度以前分	96,000	40,000
2007年度分	122,000	120,000
2008年度分	286,000	270,000
2009年度分	1,187,000	1,253,000
2010年度分	4,100,000	3,982,000
2011年度以降分	0	560,000
賛助会員	0	0
その他	3,346,826	3,593,258
科研費出版助成金	1,000,000	1,000,119
科研費公開講演会助成金	1,100,000	1,100,142
利子	8,000	1,103
AJAMES販売代金	250,000	415,000
海外郵送料実費	10,000	0
AJAMES広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	800,000	800,000
NII-ELS著作権料	178,826	178,826
早稲田大学学会補助金	0	50,000
雑費(過払い分・返却予定)	0	48,068
収入合計	16,426,591	17,107,023

(単位:円)

2010年度への繰越金内訳	9,901,664
郵便振替口座	8,600,602
三井住友銀行口座	1,212,468
Paypal口座	14,020
現金*	74,574

*ドル通貨\$105を除く

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2008年度よりの繰越金	422,509	
第25回年次大会後余剰金	95,985	
利子	165	
2010年度への繰越金		518,659
合計	518,659	518,659

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2008年度よりの繰越金	1,702,800	
奨励金		200,000
利子	555	
2010年度への繰越金		1,503,355
合計	1,703,355	1,703,355

(単位:円)

支出	09年度予算	09年度決算
事務局費	1,510,000	988,304
アルバイト謝金	950,000	517,648
通信費	70,000	68,985
消耗品費	200,000	136,106
会議費	35,000	30,320
交通費	80,000	80,860
振込手数料	20,000	13,545
事務局移転費	50,000	35,840
資料保管費	105,000	105,000
事業費	6,523,830	6,217,055
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	98,570
AJAMES25号編集費	330,000	297,644
同欧文校閱費	300,000	332,839
同印刷製本費	1,993,830	2,065,350
編集委員会交通費	200,000	129,120
ニューズレター発行費	500,000	435,225
AJAMES/NL発送費	450,000	402,516
AJAMES海外発送費	135,000	174,750
選挙費用	0	0
国際交流費	180,000	7,000
インターネット広報費	20,000	17,745
公開講演会開催費	1,100,000	1,100,142
学会奨励賞運営費	10,000	1,154
中東文献DB更新費	850,000	850,000
地域研究会協議会分担金	5,000	5,000
特別基金繰り入れ	0	0
諸雑費	50,000	0
支出合計	8,033,830	7,205,359
2010年度への繰越金	8,392,761	9,901,664
総計	16,426,591	17,107,023

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2008年度よりの繰越金	48,622	
利用料(1名)	2,000	
保育料		4,000
保育サポーター交通費		1,000
振込手数料		210
振込手数料分(事務局費より)	210	
利子	15	
2010年度への繰越金		45,637
合計	50,847	50,847

(単位:円)

2010年度予算

本会計

収入	09年度予算	10年度予算
2008年度よりの繰越金	7,288,765	—
2009年度よりの繰越金	—	9,901,664
年会費	5,791,000	5,698,000
正・学生会員	5,791,000	5,698,000
2007年度以前分	218,000	68,000
2008年度分	286,000	201,000
2009年度分	1,187,000	339,000
2010年度分	4,100,000	1,121,000
2011年度分	—	3,969,000
賛助会員	0	0
その他	3,346,826	4,973,000
科研費出版助成金	1,000,000	900,000
科研費公開講演会助成金	1,100,000	900,000
利子	8,000	4,000
AJAMES販売代金	250,000	250,000
海外郵送費実費	10,000	10,000
AJAMES広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	800,000	800,000
国際交流基金助成金	0	1,909,000
NII-ELS著作権料	178,826	200,000
収入合計	16,426,591	20,572,664

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額および納付率

年度	未納額	納付率
2006年度分		17%
2007年度分	312,000	25%
2008年度分	670,000	26%
2009年度分	1,095,000	53%
2010年度分	1,933,000	65%
2011年度分	5,670,000	
合計	9,680,000	

*各年度の年会費収入予算は、その年の会費未納額に、その前年度分会費の前年度における納付率に5%をかけて算出している例)

2010年度分会費予想収入=2010年度会費未納額×(2009年度会費納付率+5)÷100

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2009年度よりの繰越金	518,659	
利子	180	
2011年度への繰越金		518,839
合計	518,839	518,839

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2009年度よりの繰越金	45,637	
利子	14	
2011年度への繰越金		45,651
合計	45,651	45,651

(単位:円)

支出	09年度予算	10年度予算
事務局費	1,510,000	1,550,000
アルバイト謝金	950,000	1,100,000
通信費	70,000	70,000
消耗品費	200,000	200,000
会議費	35,000	35,000
交通費	80,000	20,000
振込手数料	20,000	20,000
事務局移転費	50,000	0
資料保管費	105,000	105,000
事業費	6,523,830	8,359,825
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	100,000
AJAMES編集費	330,000	330,000
同欧文校開費	300,000	300,000
同印刷製本費	1,993,830	1,970,825
編集委員会交通費	200,000	200,000
ニューズレター等発行費	500,000	500,000
AJAMES/NL発送費	450,000	450,000
AJAMES海外発送費	135,000	135,000
選挙費用	0	150,000
国際交流費	180,000	180,000
インターネット広報費	20,000	20,000
公開講演会開催費	1,100,000	900,000
学会奨励賞運営費	10,000	10,000
中東文献DB更新費	850,000	850,000
地域研究学会協議会分担金	5,000	5,000
中東研究世界大会派遣費等	0	1,909,000
特別基金繰り入れ	0	0
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	8,033,830	9,909,825
2010年度への繰越金	8,392,761	
2011年度会費分留保		3,969,000
2011年度への繰越金		6,693,839
総計	16,426,591	20,572,664

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2009年度よりの繰越金	1,503,355	
奨励金		
利子	500	
2011年度への繰越金		1,503,855
合計	1,503,855	1,503,855

(単位:円)



細則改正・会員会費特例規程制定について

2010年5月8日の総会で、次のように日本中東学会細則の改正が承認され、その規定するところにより、新たに会員会費特例規程が制定されましたので、お知らせいたします。

日本中東学会細則 新旧対照表

新	旧
平成11年5月15日制定・施行 平成12年5月13日改正 平成18年5月13日改正 平成19年5月12日改正 平成20年5月24日改正 <u>平成22年5月8日改正</u>	平成11年5月15日制定・施行 平成12年5月13日改正 平成18年5月13日改正 平成19年5月12日改正 平成20年5月24日改正
II. 2. <u>会費の特例</u> <u>会員の経済状況その他に鑑みて、理事会が認める者については、会費の特例を適用するものとする。特例の適用については別途規程を定める。</u>	II. 2. <u>海外在住会員の会費</u> <u>AJAMES等を留守宅に送付する場合は、国内在住会員と同額とする。AJAMES等を海外の住所に送付する場合は、送料を負担してもらう。</u>

日本中東学会細則

平成11年5月15日制定・施行
平成12年5月13日改正
平成18年5月13日改正
平成19年5月12日改正
平成20年5月24日改正
平成22年5月8日改正

I. 会員について

1. 会員の手続き

入会、諸変更、退会届は必ず提出することとする。

2. 会員の権利の停止

会費滞納者には滞納した年度の学会発表・AJAMESへの投稿等、会員の権利を停止する。

3. 会費滞納による退会

3年間以上の長期会費滞納者は退会とする(ただし、該当する会員には可能な限り事務局から事前に注意を喚起する)。復会にあたっては滞納会費の全納を要する。

II. 会費について

1. 会費

正会員は年額 10,000 円、学生会員は年額 5,000 円を納入するものとする。
また、賛助会員は 1 口 50,000 円(原則 2 口以上)を納入するものとする。

2. 会費の特例

会員の経済状況その他に鑑みて、理事会が認める者については、会費の特例を適用するものとする。特例の適用については別途規程を定める。

3. 振込手数料

会員の負担とする。受取手数料が生じる場合は、これも送金者が負担するものとする。

III. 役員について

1. 監事の内 1 名は選挙管理委員を務めることとする。

IV. 会議について

1. 会議の定足数

理事会は理事の 2 分の 1 以上、評議員会は評議員の 2 分の 1 以上、総会は会員の 5 分の 1 以上の出席がなければ成立しない。

ただし、予め提出された委任状をもって出席者数に加算することができる。

V. 学会事務局について

1. 事務局は、理事会の協議および理事会と関係者の協議により、会長の任期に合わせて大学・研究機関ベースで形成されるものとする。

2. 事務局は学会事務全般を担当すると同時に、和文および英文ニュースレターを発行し、会員相互の交流を促進するものとする。

VI. 会誌編集委員会について

1. 理事会は会誌発行のために編集委員若干名を委嘱し、編集委員は編集委員会を構成する。

編集委員長は編集委員の互選で選出するものとする。

2. 編集委員会と学会事務局について

編集事務を学会事務局から分離し、編集委員長の采配の下に置く。

編集委員会は原稿募集から AJAMES 完成までの業務を請け負う。

VII. 国際交流委員会について

1. 理事会は、国際交流に関わる活動をおこなうため、国際交流委員長を任命し、また国際交流委員若干名を委嘱する。

国際交流委員長および国際交流委員は国際交流委員会を構成する。

VIII. 役員選挙について

1. 理事会指名による 4 名（監事 1 名を含む）が選挙管理委員会を構成するものとする。

選挙管理委員会は、評議員、理事の選挙を実施・管理するものとする。

2. 選挙によって評議員 60 名以内、理事 13 名を選出するものとする。

3. 同点の場合の選出法は、抽選によるものとする。

IX. 附則

本細則は制定・改正日より施行される。

日本中東学会会員会費特例規程

平成 22 年 5 月 8 日制定

- I. (総則)本規程は、学会細則Ⅱ-2に規定される会費の特例について定める。
- II. (対象となる会員)理事会は以下の条件に当てはまる会員について、会費特例の適用対象とすることができる。
 1. (非常勤職特例)大学院の修士もしくは博士に相当する課程を修了もしくは満期退学した後、研究を継続しながらも、常勤の職を有さない者。ここに言う「常勤の職」には年限付きの教員・研究員等を含める。
- III. (特例会費額)
 1. (非常勤職特例)正会員として扱うが、会費 5,000 円を適用する。
- IV. (手続き)
 1. 会費の特例適用を希望する会員は、事務局を通して学会に申し出なくてはならない。
 2. 理事会は可及的速やかに特例の適用について審議し、その結果を会員に通知しなくてはならない。
 3. 理事会が必要と認める場合は、特例適用の理由となる事実を証明する文書の提出を会員に求めることができる。
- V. (改廃)本規程の改廃は理事会の発議により、総会の議決を必要とする。
- VI. (発効)本規程は平成 23 年 4 月 1 日をもって施行する。

(赤堀雅幸)

『日本中東学会年報(AJAMES)』編集委員会報告

『日本中東学会年報(AJAMES)』編集委員会よりご報告いたします。

1. 26-1 号編集集中

現在、26-1 号の編集作業を鋭意進めております。今年 7 月の刊行予定です。

2. 26-2 号投稿締め切りのお知らせ

26-2 号(2011 年 6 月刊行予定)への投稿締め切りは 6 月 20 日です。論文、研究ノート、書評など、各ジャンルへの投稿をお待ちしています。そのほか、英文による特集の企画がありましたら、ぜひお寄せください。

3. 2010 年度の欧文率

第 25 回年次総会(2009 年 5 月)で報告しました通り、『日本中東学会年報』は 2009 年度から 4 年間の予定で文科省科学研究費(研究成果公開促進費)「学術定期刊行物(欧文誌)」の交付を受けております。平成 21 年度の欧文率は 55.4%と、同研究費の要件である 50%を辛うじて 5.4 ポイント上回りましたが、欧文雑誌としての運営状況は依然として厳しいものがあります。本誌への投稿をご検討されている会員のみなさまには、英語による執筆をぜひお願いします。

4. 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) での閲覧件数

国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) を通じた本誌の 2009 年 1 月から 2010 年 4 月までの閲覧件数をお知らせします。

2009 年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
293	97	1051	267	411	418	420	125	323	451	403	445	4704

2010 年

1月	2月	3月	4月	合計
297	182	217	290	986

5. 2010 年度『日本中東学会年報』編集委員

2010 年度『日本中東学会年報』編集委員は次の通りです。

編集委員長： 青山弘之

副編集委員長： 山口昭彦、山中由里子

国内編集委員： 池田美佐子、粕谷元、加藤博、近藤信彰、武石礼司、竹下政孝、
縄田浩志、藤元優子、保坂修司、松永泰行、村上薫

海外編集委員 D. F. Eickelman, R. S. Humphreys, A. K. Rafeq

6. 会誌に関するお問い合わせ

会誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下の通りです。

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学総合国際学研究院 青山弘之研究室気付

『日本中東学会年報』編集委員会

E-mail: ajames-editor@tufs.ac.jp

(青山弘之)

第 2 回日本中東学会奨励賞の授与

2010 年 5 月 8 日、日本中東学会第 26 回年次大会総会において、第 2 回日本中東学会奨励賞の授賞式が行われました。

「日本中東学会奨励賞」は、若手研究者(論文の刊行時に 40 歳以下)の皆様が国際的な研究発信をおおいになさるよう願って、『日本中東学会年報』掲載の外国語論文の中から 2 年ごとに優秀論文を選定し、賞状と奨励金を贈呈するものです。この賞が設けられた背景には、一つには研究の国際化の要請があり、また、若い皆様が国際的な水準ですばらしい研究をなさっているのをすぐに発信して世界的にも認知してもらおう必要がある、という事情があります。

今回は、岩崎えり奈会員の論文、“What is the Aila?: A Comparative Study of Kinship Structure in Egyptian Villages” (Special Issue I: Study of Regional Diversity in Egypt from Multi-perspectives Views), *AJAMES* 22-2 (2007): 105-123 が選ばれました。この論文は、エジプトの統計局との連携による同国村落の社会調査を行った現地主義的なスタンスという点と、地理情報システム GIS を駆使して調査結果を集計・分析を行った斬新な手法という点においてきわめて秀でており、日本だけでなく世界中東研究に新たな視座を持ち込むものと高く評価され、本奨励賞受賞に値する優れた論文であると判断されました。おめでとうございます。

若手の会員の皆様方には、このような賞の趣旨をご理解いただいて、大いに外国語での論文を投稿していただきたいものです。一般論としていえば、新しい研究をなさった方は、まず母語で論文を書き、次いで外国語で論文をお書きになるということかと思います。その点からいえば、大学院生や若手の方は新しく会員になったら、まず日本語で1本、それが掲載されたら次いで英語なりで1本、という気持ちでいていただければ、大変嬉しく思います。

なお、外国語論文であれば、特集の論文でも単独で投稿した論文でもすべて対象となります。どんどん、ご投稿ください。
(奨励賞選考委員 小杉 泰)

第2回日本中東学会奨励賞を受賞して

岩崎えり奈

このたびは、日本中東学会奨励賞という立派な賞をいただくことができまして、とてもうれしく、光栄に思っております。私の研究を指導し励ましてくださった先生方に深く感謝申し上げます。

今回賞をいただいた論文は、エジプトの農村におけるアーイラ(家族)について、3つの村を比較した事例研究です。これは、2006年にアンマンで開かれた世界中東学会で発表した内容をベースに、英語でまとめ、日本中東学会年報に投稿したものです。

まさか、賞をいただけるとは思いませんでしたが、今回の賞をいただいたことが、英語や他の外国語で研究の成果を発表する人が増えるきっかけとなり、それによって少しでも役に立つことができたら嬉しく思います。

また、私自身としては、賞をいただいたことを、研究を続けていく励みにさせていただきたいと思っています。賞をいただいたことを励みに、今後も中東研究に貢献し、精進を重ねてまいります所存ですので、今後ともご指導くださいますようよろしくお願い申し上げます。

第 26 回年次大会報告

【大会プログラム】

5月8日(土) 公開講演会・シンポジウム(中央大学多摩キャンパス)

開会の辞(松田俊道大会実行委員長)

挨拶(長沢栄治日本中東学会会長)

公開講演会・シンポジウム「ナポレオン『エジプト誌』と近代文明」

趣旨説明：加藤博(一橋大学)

基調講演：杉田英明(東京大学)「ヨーロッパ人が聴いた礼拝呼びかけ—
ヴィロトー、レイン、ハーン」

長谷川奏(早稲田大学)「考古学分野における『エジプト誌』活用
の可能性—西方デルタ調査から」

チェロ・ミニコンサート 演奏：石川智美(チェリスト)・松田俊道

パネル・ディスカッション

パネリスト：杉田英明、長谷川奏、黒木英充、長谷部史彦、松田俊道

日本中東学会総会・日本中東学会奨励賞授賞式

懇親会

5月9日(日) 研究発表(中央大学多摩キャンパス)

第1部会

横内吾郎(京都大学)「ウマイヤ朝後期のメディナ統治」

亀谷学(北海学園大学)「アッバース朝初期におけるカリフのラクブとマフディー」

中野さやか(日本学術振興会)「アッバース朝宮廷の酒宴とナディームについての考
察」

中村妙子(お茶の水女子大学大学院)「シリア・セルジューク朝からザンギー朝へ—
アレッポ統治の変遷」

熊倉和歌子(お茶の水女子大学大学院)「マムルーク朝後期エジプトの土地調査記録
の継承と更新—イブン・アルジーアーン『エジプトの村々 *al-Tuhfa*』の写本の
成立過程の検討を通じて」

大塚修(東京大学大学院)「ペルシア語「系譜書」研究序説—『選史 *Tārīkh-i Guzīda*』
末文の「系譜書」を中心に」

野口舞子(お茶の水女子大学大学院)「アンダルス支配におけるムラービト朝政権と
ウラマーの関係」

第2部会

森岩紀賢(中央大学大学院)「アッバース 1 世時代 [995/1587-1038/1629] における
シャームルーの活動」

岩本佳子(京都大学大学院)「羊を持たない「遊牧民」—16世紀アダナ地域における「遊牧民の定住化」に関する一考察」

大河原知樹(東北大学)「フランス委任統治期シリアにおける結婚性向と出生力に関する一考察」

松井真子(慶應義塾大学)「18世紀オスマン帝国における通商条約とカピチュレーションの最恵国条項」

小笠原弘幸(青山学院大学)「トルコ共和国公定歴史学におけるオスマン帝国史—歴史意識とアイデンティティの検討」

河原弥生(日本学術振興会)「ワリー・ハーン・トラの「聖戦」に関する一考察—ロシア帝国併合期コーカンド・ハーン国における—スーフイーの抵抗運動とその評価について」

磯貝真澄(神戸大学大学院)「19世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域におけるマドラサ教育」

第3部会

荒井康一(上智大学アジア文化研究所)「トルコ共和国初期における右派と左派の『農民主義』—アトスズと Kadro を中心に」

佐原徹哉(明治大学)「1909年アダナ事件とジェベリ・ベレケット県」

三沢伸生(東洋大学)「エーゲ海における平明丸抑留事件(1921年)」

登利谷正人(上智大学大学院)「アフガニスタン・英領インド国境間のパシュトゥーン小勢力—ラーラプーラの事例を中心に」

小川浩史(立命館大学大学院)「初期ナセリズムの歴史の変容—国境を越えた民族解放闘争の形成と権力政治」

役重善洋(京都大学大学院)「矢内原忠雄の植民地政策論とシオニズム」

須永恵美子(京都大学大学院)「パキスタンの教科書に見られる歴史言説—イスラームとウルドゥー語の視点から」

第4部会

店田廣文(早稲田大学)「日本のムスリム・コミュニティと地域社会—岐阜市における「外国人に関する意識調査」より」

岡井宏文(早稲田大学)「地域住民におけるイスラーム・ムスリム意識の諸類型—岐阜市における「外国人に関する意識調査」より」

石川基樹(早稲田大学)「地域住民における対イスラーム・ムスリム意識の規定要因—岐阜市調査の事例より」

シナン・レヴェント(早稲田大学大学院)「戦前、戦中日本における汎ツラン主義—大陸西部進出論理の展開」

モハメド・オマル・アブディン(東京外国語大学大学院)“The Negative Impact of the Right of Self-Determination on the Process of Democratic Transformation in Sudan”
ダルウィッシュ・ホサム(東京外国語大学大学院)“The Opposition Preoccupation with the Presidential Succession Issue and Its Impact on the 2010 Parliamentary Elections in Egypt”

第5部会

小島宏(早稲田大学)「ムスリム移民におけるイスラーム信仰・実践の規定要因—日欧比較分析」
椿原敦子(大阪大学大学院)「ロサンゼルスにおけるイラン人ムスリムの宗教実践—信仰心の発露をめぐる問題から」
吉田世津子(四国学院大学)「中央アジア・クルグズスタン(キルギス)北部農村におけるイスラーム宗教職能者—「モルド」・カテゴリーとその変容」
辻上奈美江(高知女子大学)「サウディアラビアにおける罪と罰—変容を迫られるジェンダーと正義」
安田慎(京都大学大学院)「観光化による「カルバラー史観」の具現化—シリア・シリア派参詣を事例に」
岡戸真幸(上智大学大学院)「アレクサンドリアのソハーグ県同郷者団体の現状分析—都市における同郷者団体の意義について」

第6部会

高橋圭(人間文化研究機構)「20世紀エジプトの「新しい」タリーカ」
千葉悠志(京都大学大学院)「現代エジプトにおける放送メディアの変容—「汎アラブ・メディア」から「ナショナル・メディア」へ」
粕谷元(日本大学)「1923年のトルコにおけるカリフ制度論」
渡邊祥子(東京大学大学院)「フランス植民地時代におけるアルジェリア・ウラマー協会の「自由アラブ教育」運動—第二次大戦後の発展を中心に」
佐藤紀子(釜慶大学)「国家への統合原理と内包するアイデンティティの多様性—シリア正教会教徒の事例」
若桑遼(上智大学大学院)「フランス保護領統治下のチュニジアにおけるザイトゥーナのウラマー—『ザイトゥーナ誌(al-Majalla al-Zaytuniya)』の発刊期(1936年7月～1939年10月)を焦点として」
飛内悠子(上智大学大学院)「ハルツーム市郊外におけるクク人のネットワーク形成と機能—聖公会を介して」

第7部会

奈良本英佑(法政大学)「イギリスの中東におけるプロパガンダ放送と第2次世界大戦—アラビア語放送が果たした役割」

今井真士(慶應義塾大学大学院)「権威主義体制下の政党競合—名目的な民主主義的制度は与野党間の関係性にいかに作用しうるのか?」

岡野内正(法政大学)「パレスチナとイスラエルからのグローバル・ベーシック・インカムの導入—テロ防止・紛争管理への新しいアプローチ」

金城美幸(立命館大学大学院)「イスラエル社会におけるデイル・ヤーシーン事件の語り—パレスチナ難民問題への責任の否認」

田浪亜央江(成蹊大学)「アズミー・ビシャーラのリベラリズムとナショナリズム—イスラエルのアラブ人指導者のオスロ以後における政治的ビジョン」

今井静(京都大学大学院)「ヨルダンおよび西岸地区における国籍とパスポートの実態—流動するヨルダンの国民概念」

今野泰三(大阪市立大学大学院)「ユダヤ人入植者のアイデンティティと死/死者の表象—墓石・祈念碑の分析」

第8部会

濱崎友絵(東京藝術大学)「「ペンタトニズム理論」考—トルコ共和国形成期の音楽にみるトルコ民族主義の一断面」

横田吉昭(東京大学大学院)「国民国家トルコ共和国を表象した漫画家—国民的キャラクターの描出」

金谷美紗(上智大学アジア文化研究所)「脆弱な権威主義体制の安定性—エジプトの労働運動に対する分断化戦略」

平松亜衣子(京都大学大学院)「現代クウェートにおける「投資のイスラーム適格性」をめぐる議論」

黒宮貴義(一橋大学大学院)「エジプト経済における資源・海外労働に対する依存—「オランダ病」「レンティア経済」概念を用いて」

鷺見朗子(京都ノートルダム女子大学)・鷺見克典(名古屋工業大学)「アラビア語学習者におけるアラブ文化への興味と習得内容—非アラビア語専攻学生を対象として」

和氣太司(桜美林大学大学院)「湾岸諸国における私学高等教育の発展」

企画セッション1

「石油時代・中東における樹木資源の利用と保全の課題」

企画・報告：縄田浩志(総合地球環境学研究所)

報告：石山俊(総合地球環境学研究所)

報告：中村亮(総合地球環境学研究所)

「世論調査からみたエジプト社会」

企画・司会：加藤博(一橋大学)

報告・討論：伊能武次(和洋女子大学)

報告・討論：岩崎えり奈(共立女子大学)

報告・討論：富田広士(慶應義塾大学)

討論：黒田安昌(ハワイ大学)

企画セッション 2

“How Does One Oriental Entity Meet Another?: Reception of Modern Middle Eastern Literature in Japan”(英語報告)

企画・司会：岡真理(京都大学)

報告・討論：平寛多朗(東京外国語大学大学院)

報告・討論：鶴戸聡(日本学術振興会)

報告・討論：細田和江(中央大学政策文化総合研究所)

特別講演

Chang Byung-Ock (Hankuk University of Foreign Studies), “Middle East Studies in Korea and Challenges”

Choi Jin-Young (Hankuk University of Foreign Studies), “A Study on Ibn Khaldun's Linguistic Thought”

【公開シンポジウム】

公開講演会・シンポジウム「ナポレオン『エジプト誌』と近代文明」では、中東における本格的な近代を告げたといわれるナポレオンのエジプト遠征(1798-1801年)の歴史的意義とその巨大な知の遺産である『エジプト誌』での伝統文化と近代文明との交流の諸相と、以後展開される近代文明の魅力と魔力が多面的に論じられた。周知のように、『エジプト誌』はナポレオンの遠征に同行した150人以上の科学者や技術者、芸術家による観察記録を14年間の歳月を費やして、全23巻894葉にもおよぶ膨大な著作として刊行されたものである。それは、エジプト考古学を誕生させ、東方学(オリエンタリズム)のブームをヨーロッパに巻き起こした。公開講演会・シンポジウムの構成は、二つの基調報告と、石川智美氏と松田俊道会員によるチェロのミニコンサートを挟んで、その後のパネル・ディスカッションから構成された。第一の基調報告は「ヨーロッパ人が聴いた礼拝呼びかけ—ヴィロトー、レイン、ハー—」と題され、杉田英明会員が比較文学の立場から、礼拝の呼びかけという音を題材に、ヨーロッパとイスラーム世界との間の文化交流の一端を解説した。その一端として、ヨーロッパ人(『エジプト誌』でのヴィロトーと少し後ではあるが、ほぼ時代を同じくするオリエンタリストのレイン)が書き取った礼拝の呼びかけの譜面をチェ

ロでもって復元するという興味深い試みがなされた。第二の基調講演は「考古学分野における『エジプト誌』活用の可能性—西方デルタ調査から」と題され、長谷川奏会員が『エジプト誌』がもたらしたエジプト考古学における新しい学問の方法の可能性について論じた。そこでは、衛星写真を含む地図や写真の映像資料を使っ
ての、西方デルタのヘレニズム・ローマ時代遺跡の解析が試みられた。そして、この二つの基調講演を踏まえて、二人の基調講演者のほか、中世史から松田俊道会員、近世史から長谷部史彦会員、近代史から黒木英充会員という三名の歴史家をパネリストとして招いての、パネル・ディスカッションが持たれた。そこでは、『エジプト誌』に限定せず、『エジプト誌』を遺産として残したナポレオンのエジプト遠征の歴史的意義と近代の光と影が、歴史学の立場から、縦横に語られ、議論された。日本中東学会主催で音や映像を使った公開講演会・シンポジウムはこれまでもあったが、音や映像を直接にテーマとして取り上げた公開講演会・シンポジウムは今回が初めてであり、石川智美氏らによるチェロのミニコンサートともども、新しい試みとして好評であった。(加藤博)

【研究発表会場から】

第1部会

第1発表、横内五郎氏の「ウマイヤ朝後期のメディナ統治」は、マルワーン家の治世におけるメディナ総督の任命傾向とハッジの指揮権に焦点を当てた報告であった。横内氏は、ワリード1世の治世前半まではカリフの一族や外戚かつメディナ在住/出身者のメディナ総督が目立つものの、次第にその条件を全て満たす者が少なくなかったことを指摘し、同時代の他地域やアッバース朝期と比較してこの時代のメディナ総督位の特性の分析を試みた。また、この時代のハッジの指揮権は原則メディナ総督の任務であったことを提示し、カリフとその一族が指揮権を独占したアッバース朝期との相違を指摘した。何れの点についても今後さらに詳細な検討が必要であろう。

次の亀谷学氏の発表「アッバース朝初期におけるカリフのラクブとマフディー」では、貨幣史料に主に依拠して、アッバース朝初期の3人のカリフが何れも「マフディー(導かれし者)」という救世主思想を色濃く反映する称号を名乗っていたこと、「マフディー」は信徒の長の後継者にも適用可能な称号であり、第3代カリフ・マフディー・ムハンマドが信徒の長に就任した後に自らのラクブとして固定したことが論証された。さらに亀谷氏は、アッバース家とアリー家との救世主的権威を巡る争いが、結果としてアッバース朝のラクブの成立を促したと結論づけた。カリフの権威とその表明方法に関して新たな視点を提示した興味深い報告であった。

午前中最後の中野さやか氏の発表「アッバース朝宮廷の酒宴とナディームについての考察」は、その斬新な主題がまず参加者の興味をかき立てた。宮廷文化発展の

担い手とみられたナディーム(酒宴や遊興におけるカリフのお相手役)に注目し、カリフの宮廷で慣習化していった酒宴の歴史と絡めながら、ナディームの政治的役割や宮廷における地位の変化を官僚との対比において検討した興味深い発表であった。氏が研究の目的として述べたように、ナディームを通して従来の政治史研究では見えなかった宮廷のあり方が提示されただけでなく、宮廷文化を通してアッバース朝の政治のあり方を探るといった新たな方向性も示された。今後の研究の進展が期待される。

(太田敬子)

12世紀前半のシリアは、十字軍の侵入とシリア・セルジューク朝の弱体化により、様々な勢力が割拠し、合従連衡を繰り返す状況にあった。中村妙子氏の発表「シリア・セルジューク朝からザンギー朝へアレppo統治の変遷」は、そうした混乱状況の中で、ジャズィーラの軍事勢力(アルトゥク一族とブルスキー一族)が、北シリアの拠点であるアレppoを支配していく過程を分析し、セルジューク朝の内紛と十字軍の攻撃によって軍人に権力が集中したことが、ジャズィーラの軍事勢力のアレppo支配を容易にしたと指摘した。そして、アレppoを支配したジャズィーラ軍事勢力は、セルジューク朝の統治制度を温存しながら同朝の勢力を駆逐し、ザンギー朝のシリア支配の確立を円滑ならしめる橋渡しとなったと結論づけた。

ヤフヤー・ブン・アルジーアーン(1480年没)が編纂したとされる『エジプトの村々の名前についての輝かしき至宝 *al-Tuhfa*』は、マムルーク朝期土地制度史研究の重要な史料でありながら、その成立過程や編纂目的は十分に明らかにされてこなかった。熊倉和歌子氏の発表「マムルーク朝後期エジプトの土地調査記録の継承と更新—イブン・アルジーアーン『エジプトの村々 *al-Tuhfa*』の写本の成立過程の検討を通じて」は、*Tuhfa*の複数の写本を比較検討し、オックスフォード大学ボドリアン図書館所蔵の MS. Huntington 2 が、最も原本に近いと考えられることを明らかにした。その上で、*Tuhfa*をマムルーク朝の土地調査台帳の抜粋・便覧と推定し、今後の研究においては、そうした可能性を考慮しながら *Tuhfa* を利用することで、完全な土地帳簿が現存していないマムルーク朝期の土地行政の実態を解明する必要を指摘した。

モンゴル時代のイランで創出されたアラブ、イラン、モンゴルなどの諸民族の系譜は、モンゴル侵入後のムスリムの世界・歴史認識を知る上で重要であるが、系譜全体の構成や史料類型としての特徴に関する研究は行われてこなかった。大塚修氏は、発表「ペルシア語「系譜書」研究序説—『選史 *Tārīkh-i Guzīda*』末文の「系譜書」を中心に」で、ムスタウウィー(1349年頃没)の『選史』の新出写本から「系譜書」を発見し、その分析を通して、系譜の成立背景・過程、後世に残した影響について論じた。その議論を通して、『選史』などにみられる民族系譜は、モンゴルなどの新来の諸民族を一神教的歴史観に統合するために創出され、なかでも、『選史』の「系譜書」は系譜書の規範となり、後世の西アジアに共通の歴史認識の基礎となったことが明らかにされた。

野口舞子氏の発表「アンダルス支配におけるムラービト朝政権とウラマーの関係」は、ムラービト朝とアンダルスのウラマーの関係を通して、同朝のアンダルス支配を論じたものである。年代記や伝記集に記録された君主の交代や遠征におけるウラマーの関与を分析した結果、君主の即位や遠征の際、マグリブではベルベル諸部族の支持が重要であったのに対して、アンダルスではウラマーの承認が重視されるなど、ウラマーとの緊密な協働関係がムラービト朝のアンダルス支配の特徴であることが明らかになった。そして、この特徴の背景として、在地の強力な政権が存在しないなかで、アンダルス各都市のムスリム共同体を指導するウラマーが、北部のキリスト教勢力の攻勢に対抗するために、ムラービト朝の軍勢力を必要としたことがあげられた。(森山央郎)

第2部会

森岩紀賢氏「アッバース 1 世時代 [995/1587-1038/1629] におけるシャームルーの活動」は、アッバース 1 世の中央集権化をめざす改革によってサファヴィー朝を支えていた部族の政治的・軍事的役割がどのように変化したのかという問題関心に基づく発表。氏は年代記に依拠してシャームルー部が儀典長官職とヘラート知事職を維持し続けたことを明らかにし、同部がキズィルバーシュ部族のうちでもっとも有力であったと結論づけた。上記 2 つの重要職以外の同部の政治・軍事活動の解明、アッバース 1 世治世の前後の時代との比較、さらには同部と他の部族との相対化によって、論点がより深められることに期待したい。

岩本佳子氏「羊をもたない「遊牧民」—16 世紀アダナ地域における遊牧民の定住化をめぐる一考察」は、租税台帳に依拠してアダナ県には遊牧民が存在し続けたのかを問う発表。氏は「遊牧民」とよばれた集団が、総担税額に対して農作物のウシュル税の割合が過半数を占めるのに対して、家畜諸税は3～5パーセントであり、担税者一人あたりの保有家畜頭数は平均4～11頭であったことから、「遊牧民」と称された集団の約6割は家畜をもたない集団であることが明らかにされた。租税政策の観点からも重要なテーマであり、日本語の「遊牧民」と「ジェマート」とには研究者間でも認識の齟齬があるため、先行研究もふまえてことばの定義をきちんとすることによって、論点がより明確になると期待される。

大河原知樹氏「フランス委任統治期シリアにおける結婚性向と出生力に関する一考察」は、確たるデータがなかった 1918～33 年の 17 年間のダマスカスの傾向を、シリア司法省移管台帳などの新資料に依拠して明らかにする発表。1917 年にはイスタンブールと同じレベルに上昇していた男女の平均結婚年齢は、1920 年代初頭に一端平常に回帰し、またすぐに上昇していたことが確認された。次に紹介された 1920～21 年および 1937～38 年作成の台帳は、登録漏れの結婚追記が目的であり、このことから登録漏れの存在、それに対する行政の対応の一端が明らかにされた。

今や中東の歴史人口学研究をリードする存在となった氏の統計資料を主体とする発表ただけに、パワーポイントのみの発表で内容に十分追いつくことができなかつたことが惜まれる。(江川ひかり)

松井真子氏「18世紀オスマン帝国における通商条約とカピチュレーションの最恵国条項」は、国際法上の最恵国条項をめぐる議論をふまえ、カピチュレーションが恩恵的特権恵与から不平等条約に変容する過渡期を対象に、ロシア、デンマーク、プロイセンなど新たな締約国との条約に見られる相互批准と双務規定を指摘した上で、最恵国条項の具体的検討をつうじて、自由貿易条約網の形成過程を展望した。質疑応答では、相互批准の手続の方法、および締約の背景を示す諸史料について議論された。

小笠原弘幸氏「トルコ共和国公定歴史学におけるオスマン帝国史—歴史意識とアイデンティティの検討」は、過度の偏向を批判されてきた公定歴史学におけるオスマン帝国史の記述を具体的に検討し、とりわけ「トルコ史概要諸草稿」シリーズ中のオスマン王家の起源に関する論考の実証性を指摘して、史学史における公定歴史学の位置づけを問い直した。質疑応答では、歴史意識とアイデンティティおよびナショナリズムとの関係、そして「草稿」の作成理由および内容上の意義について議論された。

河原弥生氏「ワリー・ハーン・トラの「聖戦」に関する一考察—ロシア帝国併合期コーカンド・ハーン国における—スーフイーの抵抗運動とその評価について」は、この「聖戦」の経緯の分析から主導者の立場をマルギラン社会のなかに位置づけ、さらにロシア側文書にもとづき事後の主導者の処遇をめぐるロシア当局者と在地社会との複雑な関係を指摘した。質疑応答では、ワリー・ハーン・トラのスーフイーとしての事績および教団の特徴、そして彼の支持者がロシア当局に提出した釈放の嘆願書の性格について議論された。

磯貝真澄氏「19世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域におけるマドラサ教育」は、改革派ウラマーの自伝をもとに、「新教育」方式が普及する以前のマドラサで使用された書物の名称から教育課程を再構成し、アラビア語の重点的使用、「ブハラ式」との関連性、蔵書を利用した学生自身による法学とりわけ遺産分割学の学習が行われていたことを指摘した。質疑応答では、寄宿舎の有無と学生の勉学期間、「ブハラ式」との異同、そしてロシア行政・ムスリム宗務協議会がマドラサ教育に与えた影響について議論された。(堀井優)

第3部会

午前の部は、20世紀初頭のオスマン帝国とトルコ共和国の歴史に大きくかわる三つの研究発表がおこなわれた。

荒井康一氏の「トルコ共和国初期における右派と左派の『農民主義』—アトスズと Kadro を中心に」は、1930年代の「汎トルコ主義者」がさかんに論じた「農民主

義」に注目し、Kadroをはじめとする同時代のトルコ語雑誌をもとにして、トルコ共和国初期の思想潮流の一側面を明らかにしようと試みた。発表では、研究動向の紹介と分析視角の提示に多くの時間を割いたため、議論の根幹をなす実証研究の報告が駆け足になってしまったことが惜まれる。

佐原徹哉氏の「1909年アダナ事件とジェベリ・ベレケット県」は、同年にアダナ州各地で発生したアルメニア人とムスリムとの衝突事件を取り上げ、当時の行政文書に基づいて、事件発生メカニズムや社会・経済的背景を明らかにした。また、同事件の研究史上の位置づけについても、発表者独自の説得力のある解釈を提示した。明快で流暢な口頭説明は、発表者の問題意識が明確であることを反映しているかのようであった。

三沢伸生氏の「エーゲ海における平明丸抑留事件(1921年)」は、第一次世界大戦直後に発生し、近年は「第二のエルトゥールル号事件」として「美談化」の兆候を見せているといわれる平明丸抑留事件の本格的な研究に向けて、トルコ側・日本側の史料状況や事件の基本的な事実を確認したほか、当時の日本が構想した地中海進出計画の存在を示唆した。発表の端々で示された「美談化」をめぐる最新情報からも、今後の研究の進展が大いに俟たれる内容であった。

なお、いずれの発表もプロジェクターを使用して進められたものの、荒井氏と佐原氏はすでに詳細なレジュメを準備しており、とくに佐原氏の発表は口頭説明のみでも十分に理解可能であった点で、あらずもがなの感があった。この点では、口頭の説明やレジュメの記述を補う形で有効に機材を活用していた三沢氏の発表を評価したい。
(佐々木紳)

ラールプーラとは、アフガニスタンにおいて国家建設が進められていた19世紀末、英領インドとの間の要衝に位置したパシュトゥーンの小国である。登利谷正人氏の発表「アフガニスタン・英領インド国境間のパシュトゥーン小勢力—ラールプーラの事例を中心に」は、アフガニスタン内の諸勢力が国家統一の下で鎮圧されるなか、イギリスとの関係を背景に勢力を維持したラールプーラについて、その動向をイギリス・アフガニスタン・ラールプーラ三者間の関係や駆け引きから分析、考察したものである。結論では、ラールプーラを対アフガニスタンの情報収集拠点や緩衝地帯とする、イギリスの政策や思惑が指摘され、当時の地域情勢のなかで巧みに存続を図るラールプーラの姿が浮き彫りとされた。

小川浩史氏の発表「初期ナセリズムの歴史的変容—国境を越えた民族解放闘争の形成と権力政治」は、1956年までのエジプト・初期ナセル政権における解放闘争と権力政治との関係に焦点を当てたものである。もともとナセリズムに対しては、民族解放闘争のイデオロギーという見方と支配のための手段や作用という見方の、相反する2つの立場がある。発表者は、1952年革命後のナセリズムの変容を詳細

に確認し、それと当時の国内・国際情勢を照らし合わせることによって、ナセリズムへの新たな評価を試みた。結論では、民族解放闘争は権力政治の側面を内包しており、革命後に権力と結合した解放闘争が「近代的な政治領域」を形成したのではないかとの指摘がなされた。

役重善洋氏の発表「矢内原忠雄の植民地政策論とシオニズム」は、近代日本の代表的植民政策学者である矢内原忠雄(1893-1961)によるシオニズムへの言及や論述を考察したものである。矢内原の初めての学術論文である「シオン運動に就て」と代表的著書のひとつである『植民及植民政策』を取り上げられ、そのなかのシオニズムに対する考察や評価が、師である内村鑑三のシオニズム観との比較などから、詳細に論じられた。結論では、内村と同様にキリスト教的な理想社会の建設をシオニズムを含む植民に見出しながら、植民地の実情を知った矢内原はその理想実現に疑義を抱き、自らの理想的植民を描くことが出来なかったと指摘された。

須永恵美子氏の発表「パキスタンの教科書に見られる歴史言説—イスラームとウルドゥー語の視点から」は、国民統合が進まないパキスタンについて、小中学校のウルドゥー語と歴史の教科書がどのように自国を描き、位置づけているかという問題を取り上げ、その歴史言説を詳細に分析、考察したものである。その内容は、歴史の始まりをイスラームの到来に求め、スーフィズムやムガル朝に関する記述が続き、続いて19世紀以降の近代化および独立運動におけるイスラーム思想家の貢献が強調されていた。結論では、ムスリムとしての歴史観がパキスタンという国家の正当性につながる展開が確認され、ウルドゥー語とイスラームを活用した積極的な「自画像」の構築が指摘された。(松本弘)

第4部会

午前の部は、早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室による日本のムスリム・コミュニティと地域社会に関する岐阜市で実施された意識調査について、3本の報告が行われた。まず、この調査の責任者である店田廣文氏が調査のねらいと概要を説明した。滞日ムスリムは現在10万人といわれ、モスクは急増し2009年末で64を数える。ムスリムと地域社会との関係を検討するため、2008年にモスクが建設された岐阜市の周辺地区で日本人住民の意識調査を実施した。調査項目は、対イスラーム認識(先進的、厳格、寛容、攻撃的、平和など)とムスリムへの受容態度からなり、全体的に否定的な認識が存在し、性別や学歴などによる差異があることが確認された。第2報告(岡井宏文)では、認識や受容態度の差異から、統計分析により4つの類型(回答者グループ=クラスター)を抽出し、なぜそのような認識や態度をもつのかを分析した。第Iはイスラームは攻撃的な宗教とは考えておらず、ムスリムの受容に賛成なグループである。第IIは、イスラームは教えが厳格だと考え、うまくつきあえると考えているグループである。第IIIは、イスラームは攻撃的と考

え、ムスリムの受容に否定的なグループである。第 IV は、イスラーム認識においても受容態度においても曖昧なグループである。4つのグループは、回答者の属性では II が大卒者、III は高卒者が多く、情報源では II が歴史や文化に III は紛争や事件により多く触れている。第 3 報告(石川基樹)では、対イスラーム認識や受容態度を形成する要因を統計分析によって仮説の検証を行い、イスラーム認識や相互理解への積極性は受容態度を決定する要因となっていること、また、外国人との交流をもつほど肯定的なイスラーム認識や受容態度を抱くことを明らかにした。以上の報告について、活発な質疑が行われ、今回の回答者の大部分はムスリムとの直接的接触をもっていなかったが、今後接触によってどのような変わっていくのかは日本におけるムスリム・コミュニティとの関係を左右する問題であり、その意味でも本調査は重要なデータと分析であるといえる。(三浦徹)

午後の部の第 1 発表者シナン・レヴェント氏の「戦前、戦中日本における汎ツラン主義一大陸西部進出論理の展開」では、戦中戦前の日本において、対外膨張政策の根拠として唱えられたツラン主義が、皇国史観や日本国体との関係から三つの時期に分けられ検証が加えられた。導入期として、ツラン主義がハンガリーのツラン協会から派遣されたバラートシによってもたらされ、今岡十一郎によって広められた経緯が紹介された。次に発展期として、満州事変以後の日本の北進、西進論に沿う形で、一部の知識人や軍部のなかで注目された背景が検証された。そして衰退・滅亡にいたる経緯を分析するなかで、日本におけるツラン主義は、防共政策、回教政策と重なる面もあったが、政策として本格的に検討される前に敗戦とともに衰退したと結論付けられた。

2005 年、スーダンで包括的和平合意が実現し、長期に亘る南北内戦が一応の終結をみた。モハメド・オマル・アブディン Mohamed Omer Abdin 氏の発表“The Negative Impact of the Right of Self-Determination on the Process of Democratic Transformation in Sudan: Preliminary Remarks on the National Elections April 2010”「スーダン南部住民自決権が民主化に寄与するか？」では、スーダンの諸政治勢力が和平合意以後から 2010 年 4 月の国政選挙まで歩んだ過程が分析された。そして和平合意で保障された南部住民の自決権が民主化に、あるいは国の統一(unity)に寄与するかが考察された。本選挙では、多くの野党が参加をボイコットするなか、NCP と SPLM がともに其々の勢力地である北部と南部で勝利し、これまで通り NCP が優位な状態が維持された。現政権下では、民主化への移行には多くの困難が伴うと結論付けられた。

ダルウィッシュ・ホサム氏の発表“The Opposition Preoccupation with the Presidential Succession Issue and Its Impact on the 2010 Parliamentary Elections in Egypt”では、2000 年代からエジプトで盛んになった大衆による抗議運動について、ムバーラク大統領の後継問題や 2010 年秋に予定されている人民議会選挙と絡めて検証が加えられた。

最初に、ムバーラク政権への抗議運動が、その要求内容に基づき三種類に分類された。そして、2005年と2010年の両議会の法的、政治的環境が比較整理された。新現象として特に検証が加えられたのは、IAEAのバラダイ前事務総長を巡る大衆運動である。その他にも2010年議会選挙に対するムスリム同胞団の動向、大統領の後継問題に対する観測などが様々な視点から総合的に分析された。質疑応答では、時間を大幅に超えて白熱した議論が展開された。(鈴木恵美)

第5部会

小島宏氏の発表「ムスリム移民におけるイスラーム信仰・実践の規定要因—日欧比較分析」は、同氏が以前に行った「在日ムスリム調査」と欧州21か国で行われた「欧州社会調査」のマイクロデータの結果を用いて、同氏がクロス表分析とロジット分析を実施し、その成果が報告された。過去の研究の蓄積を踏まえた上での綿密なデータの分析は、これまでに類を見ないものである。ムスリム移民研究において、その分析結果がどのような意義を持つのか、今後の最終的な成果の発表が大いに期待される。

椿原敦子氏の発表「ロサンゼルスにおけるイラン人ムスリムの宗教実践—信仰心の発露をめぐる問題から」は、同氏がLAのイスラミックセンター「IMAN」で行った参与観察にもとづいて、イラン人ムスリムの宗教実践が、イラン本国の「政治」や「宗教」によってどのような影響を受けているのかを明らかにしようとする意欲的な報告であった。報告後は、アメリカ社会からの影響の有無や「IMAN」という組織の位置付けなどについて活発な議論が行われた。

吉田世津子氏の発表「中央アジア・クルグズスタン(キルギス)北部農村におけるイスラーム宗教職能者—「モルド」・カテゴリーとその変容」は、同氏がクルグズスタン北部に位置するK村で行ったフィールド・ワークをもとに、人類学的な視点から「モルド」とよばれる宗教職能者のカテゴリーの変遷を追うことで、旧ソ連邦、中央アジアの農村地域におけるイスラーム復興の実態の一端を明らかにした。ソ連時代およびソ連崩壊後の政策とその変遷によって、どのように同カテゴリーが変遷し、拡大していったかを明らかにした点は興味深いものであった。(久保幸恵)

午後の部は、それぞれ趣の異なる3本の研究発表があった。辻上奈美江氏の発表「サウディアラビアにおける罪と罰—変容を迫られるジェンダーと正義」は、近年サウディアラビア内外のメディアで注目されたジェンダーにかかわる3件の事件をとりあげ、「犯罪」の存立構造そのものを問おうとする試みであった。これに対して「シャリーア」の定義と実際、方法論などをめぐり活発な議論が交わされた。

安田慎氏の発表「観光化による「カルバラー史観」の具現化—シリア・シリア派参詣を事例に」では、シリア国外から「参詣ツアー」としてシリアへの訪問者が増えている様相を報告し、「参詣」から「観光」への変容として捉えることを提案していた。巡礼と参詣の関係、巡礼者の出身国による違いなどについてフロアから質問があった。

岡戸真幸氏は「アレクサンドリアのソハーグ県同郷者団体の現状分析—都市における同郷者団体の意義について」とのタイトルで、アレクサンドリアにおける出稼ぎ労働者のネットワークの現地調査の報告を行った。報告後の質疑応答を通じて、同郷者団体に属することとアイデンティティ構築の関連、同郷者団体が経済的つながりをさほど強化するとは思われないこと、カイロでの労働者との違いなどが明らかにした。

いずれの発表も、現地調査に基づいて新しいトピックに挑戦するもので、方法論が確立していないところでのアプローチ、センシティブな問題を扱ううえでの留意点などの困難があるとしても、今後の研究の発展が期待されることである。

(山岸智子)

第6部会

近代においては、イスラーム改革を唱える知識人たちによってスーフィー・タリーカが批判されたが、そのなかでスーフィー側がどう反応したかについて、高橋圭氏の発表「20世紀エジプトの「新しい」タリーカ」で解明が試みられた。とくに19世後半から20世紀初頭にかけてエジプトで活躍したムハンマド・タウフィーク・アルバクリーの思想が紹介され、彼が、エジプト独立という政治目標や、西洋思想からの影響という点で、同時代の近代主義者たちと多くの立場を共有しながらも、ビドアや迷信といった攻撃からタリーカを擁護し、また、ムスリム全般の宗教実践といった、より普遍的な価値体现の実践として、タリーカを位置付ける思想が明らかにされた。

現在の衛星放送やインターネットなど、いわゆる「ニューメディア」が、アラブ世界に自由化や民主化をもたらしたとされる役割を解明するには、その前段階である、20世紀後半からのメディアの歴史的な流れをふまえ、広範な視野で捉える必要がある。この見地から、千葉悠志氏は発表「現代エジプトにおける放送メディアの変容—イスラーム復興期を中心として」で、エジプトのナセル時代から現在にいたるラジオとテレビの番組内容を分析・統計化し、とくに70年代以降のラジオとテレビが、政府の意図によって、「汎アラブ」的なものから、より国内に目を向けた「ナショナル・メディア」的なものへと、その方向性を強めた点を明らかにした。

1922年に大国民議会在スルタン＝カリフ制をスルタン制とカリフ制に分離し、前者を廃止して以来、カリフの職責と権能をめぐる論議がわきおこり、続いて1924年には、カリフ制が廃止される。粕谷元氏の発表「1923年のトルコにおけるカリフ制度論」では、この廃止直前の1923年に多く刊行された、カリフ制を論じる著書群への整理・分析を通じて、これらの論調が実際の政治展開に影響を与えてゆくなかで、いわゆる「精神的カリフ論」「象徴カリフ論」に代わってカリフ制廃止(不要)論が台頭してゆく経緯を明らかにした。これらはトルコの世俗主義、政教分離論への理解のあり方に繋がるものでもあり、質疑応答が活発におこなわれた。(熊谷哲也)

午後の部の第1発表者、渡邊祥子氏「フランス植民地時代におけるアルジェリア・ウラマー協会の「自由アラブ教育」運動—第二次大戦後の発展を中心に」は、フランス植民地政府の学校(教育制度)とは別に、アルジェリア・ウラマー協会が創設したアルジェリア人子弟のためのマドラサとそこでのアラビア語による教育(自由アラブ教育)の社会的影響力と第二次大戦後の制度的発展の意味を再検討しようとする発表であった。自由アラブ教育が階層的にも多様な層に広がり、制度的にもより普遍的になりつつあり、教育のレベルでフランス植民地政府に対抗する運動とみる、などの点で *Colonna* などの先行研究に修正を加えようとする意欲的なものであった。また手法もアラビア語の一次資料をもとに分析した実証的研究であった。「フランス教育と共存しつつ、より競争的になっていったのではないか」という問題提起は民族運動(あるいは独立運動)の枠内の議論をさすと思われるが、そうであるなら専門外の者にとっては説明の仕方を変える方がわかりやすかったかもしれない。

次に佐藤紀子氏「国家への統合原理と内包するアイデンティティの多様性—シリア正教会教徒の事例」は、シリアのシリア正教会教徒がシリア国家の政治的枠組みに統合する試みと、それに伴う内部での意見の相違を、彼らの出自(古代)をどう位置付けるか、つまりアイデンティティの多様性によるジレンマとみなす発表であった。そもそもこの場合のアイデンティティが宗教に基づくのか、地域に基づくのか、欧米に移住したシリア正教会教徒の移住の動機などさまざまな質問が出されたが、マイノリティーとしての主張を強めた場合、クルド系住民と同じような弾圧を受けるかもしれない、との発言にあったように、シリアにおける少数派のアイデンティティ問題と国民統合の問題を、歴史と現代とのせめぎあいとして論じた好発表であった。先行研究に、佐藤氏の研究が何を、どのような点でつけ加えたのか、修正したのかがわかればもっとよかったと思う。

続いて若桑遼氏「フランス保護領統治下のチュニジアにおけるザイトゥーナのウラマー—『ザイトゥーナ誌(*al-Majalla al-Zaytuniya*)』の発刊期(1936年7月~1939年10月)を焦点として」は、チュニジアでもっとも権威ある教育機関「ザイトゥーナ」が創刊した『ザイトゥーナ誌』に発表された論稿の分析を通じて、ナショナリズム昂揚期(1936-1939年)におけるウラマーの政治的、社会的、文化的傾向を分析した報告であった。非政治性を強調する *Green* と(非政治的ではあるが)社会的、文化的活動の影響力を強調する *Ayyashi* の二傾向の先行研究をふまえた上で、報告者は、当時のウラマーの立場は過度のナショナリズムを牽制し、イスラーム的連帯の強調(ハッジの重要性強調など)やムスリムの教導などを重視した、との結論を導いた。わが国ではほとんど知られていない新分野の開拓という期待感をいだかせる報告であった。結論は二つの先行研究の中間、ということになるが、植民者(フランス)がキリスト教徒である以上は、ウラマーの影響力は政治的にならざるを得なかったわけで、その説明にもう少し踏み込む方が論点はより明確になったと思われる。

最後に飛内悠子氏「ハルツーム市郊外におけるクク人のネットワーク形成と機能—聖公会を介して」は、内戦によってハルツームにのがれてきた聖公会キリスト教徒クク人が教会を通じて形成したネットワークと、そのコミュニティとの関係を、人類学的に考察した報告であった。遠く故郷(スーダンとウガンダ国境)を離れて避難生活をするクク人が、教会コミュニティに参加することを介して、社会的ネットワークを形成すること、が報告者自身のフィールド・ワーク成果に基づき明らかにされている点で説得力のある報告であった。避難生活が長くなるにつれて、教会に来なくなったり、教区コミュニティから離れつつあったりする若者が出ているようであるが、それは政治的、社会的、宗教的緊張関係が弱くなってきていることと関係してはいないだろうか。また彼らを結びつけるネットワークの核は教会以外に何があるのか。政治的、社会的緊張とクク・コミュニティとの相関関係、教会以外のネットワークなどの説明がある方が、わかりやすかったと思う。(私市正年)

第7部会

午前の最初の報告、奈良本英佑氏による「イギリスの中東におけるプロパガンダ放送と第2次世界大戦—アラビア語放送が果たした役割」は、英国が1930年代末から展開した中東でのプロパガンダ放送について、英国議会資料の分析を通して丹念に検討したものであった。英国は、委任統治下にあったパレスチナを拠点に英語、ヘブライ語、アラビア語のラジオ放送を次々に開始したが、それらはアラブ人住民の敵対心を鎮めると同時に、枢軸国の影響力を払拭するための役割を果たしたことが明らかにされた。質疑応答では、これらの放送がなぜアラブ人に受け入れられたのか、また、プロパガンダの成否をどのように評価するのか、などの質問がなされた。

続く今井真士氏の報告、「権威主義体制下の政党競合—名目的な民主主義的制度は与野党間の関係性にいかに作用しうるのか?」では、近年において比較政治学の分野において権威主義体制に関する研究が活発化しているにもかかわらず、いわゆる「名目的な民主主義的制度」の下での政党間競合についてはほとんど論じられていないと指摘する。その上で、比較政治学の手法に基づき、エジプトとイエメンの2つの中東諸国を事例に与野党間関係のパターン化と一般法則の析出を試みるものであった。質疑応答では、フロアから、権威主義体制下での低投票率の問題や、仮説設定におけるリサーチデザイン自体の妥当性についてのコメントが寄せられた。

岡野内正会員の報告、「パレスチナとイスラエルからのグローバル・ベーシック・インカム導入—テロ防止・紛争管理への新しいアプローチ」は、最低所得保障の一種であるベーシック・インカム(GBI)を国際社会のレベルに拡大・導入することによって、パレスチナ問題が非暴力的に解決され得る可能性を検討するものであった。そこでは、停戦・軍縮や産業構造の転換、記憶を掘り起こすための証言集会など、GBIの試験的導入が実際に効果を発揮するための諸条件および具体的な政策提言が論じら

れた。質疑応答においては、人口増加や景気循環、戦闘や占領の継続などの諸問題や不確定要素を加味する必要が指摘された。「紛争解決」と「開発」が政策的にも学問的にも乖離した状態にある現状を勘案すれば、こうした試みを提唱することは両者の橋渡しとなり、大いに意義を見出すことができよう。(末近浩太)

金城美幸氏の報告「イスラエル社会におけるデイル・ヤーシーン事件の語り—パレスチナ難民問題への責任の否認」は、1948年のイスラエル建国に先立って起きたデイル・ヤーシーン村での虐殺事件をめぐる、イスラエル社会内部でみられる評価の相違と、歴史記述の対立を、事件直後から現代に亘って分析したものである。事件に対する評価は、イスラエル内部での権力対立や、パレスチナ難民の発生に対する責任の所在の問題と連動している。事件を起こしたシオニスト右派のイルグンおよびレヒによる事件の記述は、主流派として長期政権を握った労働党(マパイ)やハガナーによるマスター・ナラティブと対立する。金城氏はこうした歴史観の対立を、各々の立場からの出版物や声明など一次資料に基づき明らかにした。

イスラエルの元クネセト(イスラエル国民議会)議員アズミー・ビシャーラは、アラブ人政治指導者として大きな存在感をもつ。田浪亜央江氏の報告「アズミー・ビシャーラのリベラリズムとナショナリズム—イスラエルのアラブ人指導者のオスロ以後における政治的ビジョン」は彼の政治思想について、政党「タジャンモウ」のパンフレットや本人の著作などに基づき検討したものである。ビシャーラは1996年、クネセト選挙に際してイスラエル共産党と袂を分かち、「タジャンモウ」を結成した。同党は近代リベラリズムの理念にもとづく平等な市民権の実現をテーゼとし、またイスラエルのアラブの民族的マイノリティとしての文化的自治を求めた。こうした方向性は、オスロ合意以降の新たなアジェンダを求めるアラブ市民の声に応えたもので、支持を集める要因となったと分析された。

ヨルダンおよび西岸地区在住のパレスチナ人には、現在広くヨルダン国籍とパスポートの取得が認められている。今井静氏の報告「ヨルダンおよび西岸地区における国籍とパスポートの実態—流動するヨルダンの国民概念」はそうした実態を、ヨルダン政府にとっての法的地位付与の特異な政策という観点から捉え、建国期から現在に至るまでの変遷を明らかにしたものである。制度の変更は、ヨルダン政府による西岸地区の併合、イスラエルによる占領、フサイン国王による西岸分離宣言、自治政府の設立などによりもたらされた。「ヨルダン国民」の範囲はそれらの状況に応じて可変的であり、紛争の継続と相互依存的に成り立っていることが、分析を通して指摘された。

1967年以降、西岸地区ではイスラエル入植地の建設が進められてきた。今野泰三氏の報告「ユダヤ人入植者のアイデンティティと死/死者の表象—墓石・祈念碑の分析」は、そのなかでも宗教シオニストの活動的メシア主義者が果たす役割に注

目し、入植者の死／死者が彼らによってどのように語られ、記念され、空間上に表象されているのか、類型化と分析が行われた。研究対象とされたのは、西岸地区に埋葬された入植者の墓石や記念碑、および死／死者をめぐる語り継がれるナラティブ等である。報告ではいくつかの事例の紹介を交えながら、これらの表象が入植者たちの政治的・宗教的イデオロギーと多様な形で結びつき、入植・入植地を正当化する論理を補強する役割を果たしていることが実証された。(錦田愛子)

第8部会

濱崎友絵氏の発表「『ペンタトニズム理論』考—トルコ共和国形成期の音楽にみるトルコ民族主義の一断面」は次の内容であった：トルコ共和国成立の段階で、多くの分野でトルコ国民意識の形成と高揚が図られた。音楽という芸術面でも、「ペンタトニズム(五音)音階」理論がトルコ人音楽学者によって提唱された。この理論は、ペンタトニズム音階が中央アジアから移動したトルコ民族の手によって運ばれ、トルコ共和国に残ったという内容である。この理論は歴史学会での「トルコ史テーゼ」や言語学会での「太陽言語説」と同じように、トルコ民族の優秀性を主張するものであった。そして、このペンタトニズムの要素は同じくアジア系の血を引くハンガリーの民族音楽の中にも見られるとされた。これによって、長く通俗的と見られていたトルコ民族音楽の「権利」を主張されたのである。

横田吉昭氏は「国民国家トルコ共和国を表象した漫画家—国民的キャラクターの描出」について発表した。トルコには、カラギョズという伝統的図像が存在していた。オスマン帝国末期にその伝統はフランスのカリカチュアの影響を受けながら、発展していった。共和国成立以降、制約を受けながらも、ジャーナリズムの普及は漫画の成長を促した。特に、コミカルな男性として描かれたアムジャベイは、都市に住む近代的国民生活の「表」の表象であり、また、同じくコミカルに描かれた女性であるトンブル・テイゼは、西洋化・近代化を示すトルコ人の心の中にある「裏」の表象であった。これらの伝統は、現代でも批判メディアとしてトルコで機能している。

エジプトの政治体制は一般にポピュリズム体制と評価されている。しかし、実際には体制は一般労働者の取り込みに失敗しており、その基盤は非常に脆弱なものであった。金谷美紗氏の発表「脆弱な権威主義体制の安定性—エジプトの労働運動に対する分断化戦略」は、そのような脆弱な政治基盤がありながらも体制が継続している理由を、労働者などに対する三つの分断化の成功であるとした。そしてエジプトの権威主義的体制は労働者の取り組みが不十分であるが故に存続しており、同時に一般労働者は独自の活動を行うことが困難な状況にあると指摘した。また、発表者は比較研究の対象として、メキシコの事例を取り上げることで、よりエジプトの状況を明確化した。しかし、そのエジプトも近年はネオリベラル改革によって、労働運動の激化が見られる点も最後に加えた。(宮武志郎)

午後の発表は、湾岸諸国に関するもの、レンティア経済に関するもの、アラビア語教育に関するものと、非常に多様であった。

平松亜衣子氏の発表「現代クウェート議会における「投資のイスラーム適格性」をめぐる議論」は、クウェート議会で政府系ファンドのイスラーム適格性が議論されるようになった状況を、イスラーム復興勢力の台頭によるものとして論じたものである。ディスカッションにおいては、イスラーム適格性の議論が議会での政府批判の手段である可能性を排除できないという指摘がなされた。議会での議論がクウェートでのイスラーム復興を反映したものであると論じるのであれば、イスラーム適格性の議論の発生とイスラーム系議員の増加という二つの現象の間の相関関係の存在を証明するに足る分析が必要とされ、そのためには効果的な分析対象(金融機関やイスラーム適格性の議論の場)の選定が求められるだろう。

続く黒宮貴義氏の発表「エジプト経済における資源・海外労働に対する依存—「オランダ病」「レンティア経済」概念を用いて」では、石油輸出収入と在外労働者からの送金によって、エジプト経済のオランダ病／レンティア経済的状況が、1970年代末から80年代にかけて発生していたことが明らかにされた。オランダ病／レンティア経済的状況が存在することを、具体的なデータを挙げて説明することには成功しているものの、教科書的な説明が多く、オランダ病の発生メカニズムやレンティア経済の仕組みを、エジプトを例に再確認したにとどまっていた。現状調査としては十分なので、これを発展させて今後の研究につなげることが求められる。

鷺見朗子氏・鷺見克典氏の発表「アラビア語学習者におけるアラブ文化への興味と習得内容—非アラビア語専攻学生を対象として」では、日本の大学におけるアラビア語初学者に対するアンケート調査を下に、学生のアラビア語科目に対する意識が分析され、アラブ文化への興味を引き出すことが、アラビア語学習の意欲を高めることにつながるという結果が明らかとなった。結論もさることながら、学生がアラビア語科目に希望している修得希望内容と、授業で重要視されている(と学生が見なしている)事柄がほぼ不一致であることや、学生がアラビア語を難解だと感じることと学生のアラビア語科目の内容への意識が無関係であることなど、非常に興味深い分析結果が報告された。今回発表された調査結果がアラビア語に独自のものであるのか、興味が湧くところである。

和気太司氏の発表「湾岸諸国における私学高等教育の発展」では、湾岸アラブ諸国における私立大学の増加が、経済のグローバル化による外資の教育部門への進出や、労働力の現地人化などを背景に生じたものとして論じられた。ディスカッションにおいては、高等教育の拡充は労働力の現地人化にはつながらないこと、外資の流入はグローバル化よりも政府が外資を利用することで支出を抑制する意味が強いことなど、発表の論理構成の再構成を促す意見が出された。また、湾岸アラブ諸国が石油経済から知識集約産業に転換する政策と関連付けることが可能なのではないかという

指摘もなされた。湾岸地域の高等教育という現場を経験した者ならではの豊富な知識を、アカデミックな分析に対応させることが求められる。(松尾昌樹)

企画セッション 「石油時代・中東における樹木資源の利用と保全の課題」

本セッションは、日本中東学会では数少ない自然環境・資源の問題をテーマとしたもので、化石燃料の枯渇が迫りつつある現在、脱石油資源依存型の生活様式の創造のためには「人間と自然の相互作業の環」の解明が必要であるという趣旨に基づいたものである。今回は特に樹木資源に焦点をあて、縄田浩志氏、石山俊氏、中村亮氏がそれぞれの調査地での研究成果を報告された。縄田氏の報告は「アラビア半島のビャクシン林にみる伝統的な資源利用と保全」と題したもので、伝統的な自然保護の概念ヒマーをイスラーム法と地域社会の慣習との関わりから跡づけた後、ビャクシン林が現代国家によって環境保全という近代的概念枠組みのなかで自然保護区として管理されることとなり、むしろその保全に問題が生じてきている現状が明らかにされ、その解決に向けた幾つかの提言が示された。

石山氏は「サハラ南縁地域の森林破壊と改良カマド」と題し、チャド共和国における国際協力の事例研究について報告された。人口増加に伴い、薪使用による森林破壊と砂漠化が問題視され、その解決策として改良カマドの普及が推進された。しかし、実際の世帯調査からは改良カマドの導入が必ずしも薪の消費量の削減に結びついておらず、薪消費の節約にはさらに食材や調理法また薪の割り方なども考慮する必要があることが指摘された。

最後に中村氏が「スワヒリ海岸南部タンザニア・キルワ島におけるマングローブ資源の直接利用と環境利用」と題して報告された。キルワ島のマングローブ利用は、建材や燃料などへの直接利用と、マングローブの内海自体を漁場や航路として活用する環境利用に大別されるが、この樹木の過伐採は内海の環境破壊に繋がるため、島の生活はこの二つの利用法の絶妙なバランスの上に成り立っていることが豊富なデータとともに明らかにされた。

いずれも長年の現地調査の精緻なデータに基づく実践的研究であり、現代のグローバルイシューである環境問題に果敢に挑戦する研究姿勢が印象的であったことと、また中東学会の研究領域がますます広がりつつある、新しい可能性が感じられるセッションであった。(鷹木恵子)

企画セッション 「世論調査からみたエジプト社会」

本セッションは、文部科学省ニーズ対応型地域研究推進事業「アジアのなかの中東」のなかで、2008年に日本の研究者が独自に実施したエジプト国民に対するアンケート調査の分析結果を紹介し、その後の討論から今後のアンケート調査に基づくエジプト地域研究の方向性を探るために設定された。まず、司会の加藤博から、「ア

ンケート意識調査からみたエジプト社会—住民意識の地域偏差」と題された企画の趣旨説明の中で、アンケート調査を学際的共同研究の手段として注目したこと、また、分析の対象となった2008年のアンケート調査の独自性がエジプトの地域差を考慮したことにあることが指摘された。この趣旨説明を踏まえて、本セッションは、三つの報告とそれに対する一つのコメントから構成された。第1報告は「エジプト世論調査」に見る政治・社会意識と地域差」と題され、伊能武次会員が、好調な経済事情が謳われる反面、社会に不満と閉塞感が広まっているといわれるエジプトの時代状況を指摘した後、都市県(カイロ、ポート・サイド)、下エジプト県(メヌフィーヤ、カフル・シェイフ)、上エジプト県(ベニー・スエフ、ソハーグ)の三つの地域ごとの住民の閉塞感を分析し、こうした閉塞感の社会経済的背景の分析を今後の研究課題として指摘した。第2報告は「エジプトにおける社会意識の地域差—2008年エジプト全国調査をもとに」と題され、岩崎えり奈会員が、調査結果からうかがわれる社会意識を多重対応分析にかけ、上記三つの地域に意識の違いがあることを指摘した。その上で、地域差のもっとも顕著な背景要因として学歴の差を取り上げ、学歴と不公平感との関連を分析した。第3報告は「2008年全国世論調査から見えるエジプト人の政治意識—2007年シリア全国調査および大カイロ地域調査との比較を手掛かりに」と題され、富田広士会員が、政治意識と政治参加を中心に、2008年のエジプト意識調査の結果とそれ以前の2007年に実施されたシリア全国調査および大カイロ地域調査の結果との比較をおこない、上記三つの地域差の指摘がおおむね正しいことを指摘した。そして、最後に、以上三つの報告を踏まえ、黒田安昌会員から、地域研究におけるアンケート調査の有効性についての問題提起があり、それをきっかけにフロアーの参加者を含めた活発な議論が展開された。(加藤博)

企画セッション “How Does One Oriental Entity Meet Another?: Reception of Modern Middle Eastern Literature in Japan”(オリентはほかのオリентにどのように出会うのか—日本における現代中東文学の受容について)

日本ではこれまでどのような現代中東文学作品が翻訳・紹介され、その選択にはいかなる要因が作用しているのか。まず平寛太郎さん(東京外国大学)がアラビア語アラブ文学について、60~70年代のアジア・アフリカ作家会議の活動と思想に焦点を絞って報告。当時の世界的な第三世界主義と連帯する文学運動の一環として、アラブ現代小説が積極的に翻訳されたと論じた。続く鶴戸聡さん(東京大学)はアルジェリアを中心とするマグレブ文学について、半世紀にわたる受容史の変遷を詳細に紹介、最後に細田和江さん(中央大学)が、ホロコースト文学と児童文学という2ジャンルが突出して翻訳・紹介されているイスラエル文学について報告した。午前中の報告にもかかわらず20人以上の参加者があり、質疑も活発に行われ、文学研究に対する潜在的な関心の高さがうかがわれた。(岡真理)

特別講演

招聘した韓国中東学会の元会長チャン・ビヨン・オク教授と現事務局長のチョイ・ジン・ヨン教授から以下の特別講義をいただいた。帰国の予定の都合のために、講義の時間が短縮されたのが残念であったが、有意義な意見交換がなされた。

Chang Byung-Ock 氏の“Middle East Studies in Korea and Challenges”では、韓国の中東研究の歴史について、その前史というべきシルクロードを通じたイスラーム世界と朝鮮半島との関係の歴史に始まり、第一次石油危機以降の経済関係の強化と結びついて発展してきた大学や学会組織、研究者数、研究領域の変化などについて具体的な説明を行い、現在、直面している研究の課題についての卓見を披露された。地域研究の必要条件の充実と日本を含めた国際交流の重要性などについて、報告者の専門であるイランとの学術交流をビデオなどの資料を使って解説された。日本と比較して現地とより濃厚な関係を構築している状況を知り、参考になるとともに刺激を与えられた。

Choi Jin-Young 氏の“A Study on Ibn Khaldun’s Linguistic Thought”では、イブン・ハルドゥーンの言語学理論を現代言語学の枠組みによって解釈しなおす意欲的な試みが披露された。とくに al-malakah al-lisāniyyah (言語的慣習) 概念に関する再解釈によって、イブン・ハルドゥーンの言語学理論はノーム・チョムスキーの生成文法理論の先駆をなすものと位置づけることができるとし、言語獲得の過程に関する新しい知見を得る可能性をもっている点を強調された。またその言語学理論は、歴史的な視点によって生み出されたものであり、この点は古典派経済学に先行するといわれる彼の経済学理論についても共通しているという感想をもった。 (長沢栄治)

【年次大会託児所会計報告】

収入		支出	
繰越金	45,637	保育料	28,200
利用料(2名)	7,000	サポーター交通費	1,400
		振込手数料	525
		次年度繰越金	22,512
計	52,637	計	52,637

【大会決算】

収入		支出	
大会開催費	300,000	封筒代	9,450
中央大学補助費	90,000	プログラム印刷代	35,868
参加費(事前)(163名)	163,000	大会プログラム送料	60,919

参加費(当日)(100名)	100,000	文具代	21,708
懇親会費(事前)(正67名)	335,000	ポスター代金	28,550
懇親会費(事前)(学34名)	136,000	発表要旨印刷代	129,990
懇親会費(当日)(正24名)	141,000	公開講演会謝金	50,000
懇親会費(当日)(学11名)	53,000	弁当代	134,000
弁当代	84,000	懇親会費	550,000
錯誤振込	21,000	錯誤振込返金	21,000
書店寄付	20,000	休憩室飲み物等	5,252
		コピー代金	80,460
		アルバイト代金	181,000
		振込料	500
		アルバイト慰労金	30,000
計	1,443,000	計	1,338,697
		支差引残高	104,303

【大会を終えて】

今年度の大会を恙無く終えたことを大会実行委員長として何よりも嬉しく思っている。大会運営は一年に亘る長い期間であったが、当初想像もしていなかったほど多くの方々の協力を得て初めて可能になったように思う。献身的に協力してくれた実行委員の方々及び主催校である中央大学の文学部の職員一同には心より感謝したい。また、大会当日の2日間協力してくれた大学院生諸君にも感謝したい。

大会参加者は、事前申込者が163名、当日申込者が100名、ゲストが4名で合計267名であった。研究発表は8部会と企画セッション(特別講演)が2部会で、合計10部会が設けられ、およそ60本の発表が行われ盛会であった。

今大会を振り返ってみると、最初に置かれていた大会事務局が機能不全に陥ってしまい、発表を予定していた方々にご迷惑をおかけし、さらにプログラムに訂正版を追加するなどの事態に陥ってしまった。止むを得ず事務局を移転し松田が引き継いだ。期限が迫る中で黙々と発送作業を手伝ってくれた有志の方々には多大な労苦をかけてしまった。その後諸事を無事に乗り切ることができたのは、五十嵐大介事務局長代理の獅子奮迅の活躍があったからである。とりわけ、大会直前の緻密な準備と采配ぶりを見事であったことを付け加えておく。

公開講演会・シンポジウムでは『エジプト誌』と近代文明を取り上げたが、中東研究者には興味の尽きないテーマであり、各講演者、パネリストによる力のこもった発表は予定していた時間では足りないほどであった。会場となった3115教室はこの春リニューアルしたばかりで最新の機材が装備されていて、映像を使う企画に

はちょうど良かった。アザーンをチェロで演奏する試みは大変好評であったと思う。杉田会員、チェロ奏者の石川さんとは事前に入念なりハーサルを行っていた。

今大会では、中央大学広報課の尽力で読売新聞社に後援という形で、大会の事を紹介する記事を新聞に書いていただいた。『エジプト誌』地図の展示にあたっては、雄松堂書店の協力を得て設営ができたことを報告しておく。また、山梨県甲州市の丸藤葡萄酒工業株式会社からは「ルバイヤート」を1ダース、青梅市の小澤酒造からは清酒「澤乃井」を3升寄付していただき、懇親会が盛り上がったことに改めて感謝したい。最後に本大会の運営を特に大きな問題もなく終えることができたのは、前大会の堀井事務局長から詳細な覚書きを引き継いだことと学会事務局の店田事務局長の適切なアドバイスがあったからでもある。次期大会への引き継ぎを万全に行えるように努めたい。
(松田俊道)

4月に大会事務局が松田研究室に移転したことに伴い、急遽事務局長代理として大会運営にあたることとなりました。

会場となった文学部棟は、構造がわかりづらいと在校生からも不評が出る、いわく付きの建物であり、参加された会員の方々からも「受付の場所がわかりづらい」「部屋がどこかわからない」等の苦情が多く寄せられました。特に2日目の研究発表の日には、部会の部屋のセッティングに手間取り、モノレール駅から文学部棟に案内する案内板の設置が遅れたことから、参加者の皆様には大変ご迷惑をおかけいたしました。当日は受付で会場の地図を配布しましたが、できればあらかじめプログラムとともに郵送するべきだったかと、後で反省しきりでした。

恒例となった託児所は、八王子の市民グループ・はちっ子にご協力いただきました。私自身も本学会の託児所を今回初めて利用いたしました。小さな子供を持つ身として非常にありがたいものでした。手弁当で託児所を運営している学会は大変珍しく、このような制度を立ち上げ、続けてこられた先達の皆様に感謝いたしますとともに、中東学会の目玉として今後も継続していくべきものと感じました。

お忙しい中司会を引き受けてくださった皆様、現場スタッフとして大会運営を支えてくれた中央大学の大学院生・卒業生・西洋史研究室の室員の方々にはこの場を借りてお礼申し上げます。特に、事前準備から当日の運営まで先頭に立って働いてくれた松本隆志会員に感謝します。

最後に、遠路はるばる多摩の山奥まで足をお運びいただいた参加者の皆様にお礼申し上げます。
(五十嵐大介)

私は今回、第26回年次大会の中央大スタッフの一員として参加しました。昨年中から中央大での開催を知らされていたので、来年は忙しくなりそうだ、などと思っ
てはみたものの、根が怠惰な人間なためか、具体的な作業が始まるまでは安穩としていました。

年が明けて徐々に忙しくなっていく、4月には連日の作業となりました。ああしておけば良かった、こうしておけばもっとスムーズだったのに、などと先手を打てなかったことを後になって悔いる場面が多かったように思います。経験と想像力の欠如はこうして実害となってあらわれるのだと思い知りました。

いざ始まってしまえば、あっという間の二日間でした。開催側に立ってみて、これまで自分が当たり前のように享受し、また要求していた、スムーズでストレスの少ない学会というものが、いかに多くの人々の多大な労力によって支えられているのかを知りました。今後はそうした労力を提供してくださる方々に深く感謝するとともに、自分ももっとより良い担い手になっていかなければ、と思った次第です。

多くの方々にご参加をいただき、まことにありがとうございました。（松本隆志）

会員の異動

【新入会員】

石合 力

井上 貴智

遠藤 春香

鈴木 啓之

陶 李

橘 弥代治

中村 菜穂

南里 浩子

濱崎 友絵

平川 大地

深江 裕美

増野 伊登

松山 洋平

森岡 知子

横内 吾郎

横田 吉昭

【所属先・連絡先の訂正・変更】

青柳 かおる

池田 美佐子

苅谷 康太

シナン・

レヴェント

鈴木 日出生

辻 明日香

内藤 正典

長岡 慎介

錦田 愛子
林 玲子
黛 秋津
矢作 朋宏

山岸 智子
山崎 和美

吉川 洋

吉村 武典

寄贈図書

【単行本】

飯塚正人、高松洋一、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(編)『豊穡なるエジプト 1841-44——フランスのエジプト学者プリス・ダヴェンヌの石版画より』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2010年。

鹿島正裕『中東政治入門——現状はどのように生まれたか』第三書館、2010年。

水田正史『第一次世界大戦期のイラン金融——中東経済の成立』ミネルヴァ書房、2010年。

Alamu, O. O., *Aesthetics of Yorùbá Film*, LiCCOSEC vol. 10, 大阪大学世界言語研究センター「民族紛争の背景に関する地政学的研究」、2010年。

Terasaka Akinobu and Mizuuchi Toshio (eds.), *Geographical Views in the Middle Eastern Middle Eastern Cities*, Vol. 4. *Migration & Ankara Part 2*, Ryugasaki, Ibaraki: Study Group on Middle Eastern Cities, Ryutsu Keizai University, n.d.

Terasaka Akinobu and Naito Masanori (eds.), *Geographical Views in the Middle Eastern Cities*, Vol. 2: *Syria*, Ryugasaki, Ibaraki: Study Group on Middle Eastern Cities, Ryutsu Keizai University, 1990.

Terasaka Akinobu and Nakabayashi Itsuki (eds.), *Geographical Views in the Middle Eastern Cities*, Vol. 3: *Ankara*, Ryugasaki, Ibaraki: Study Group on Middle Eastern Cities, Ryutsu Keizai University, 1992.

Geographical Views in the Middle Eastern Cities, Vol. 1: *Turkey*, Ryugasaki, Ibaraki: Study Group on Middle Eastern Cities, Ryutsu Keizai University, 1989.

Neighbours and Neighbourhood: Selected Papers from the Belgrade Conference (September 17-18, 2009, Serbia) and the Zagreb Conference (September 21-22, 2009, Croatia), LiCCOSEC vol. 11, 大阪大学世界言語研究センター「民族紛争の背景に関する地政学的研究」、2010年。

【逐次刊行物】

『アラブ・イスラム研究』7号、関西アラブ研究会、2009年。

『岡山市立オリエント美術館研究紀要』24号、岡山市オリエント美術館、2010年

『季刊アラブ』132号、日本アラブ協会、2010年。

『現代の中東』47号、アジア経済研究所、2009年。

『考古学が語る古代オリエント—Ancient Orient Revealed through Excavations in 2009』
(第1回西アジア発掘調査報告会報告集)日本西アジア考古学会、2009年。

『上智アジア学』27号、上智大学アジア文化研究所、2009年

『第10回アジア太平洋フォーラム・淡路会議』アジア太平洋フォーラム・淡路会議、
2009年。

『地域研究』9巻1号、京都大学地域研究統合情報センター、2010年。

『東方学会報』96号、財団法人東方学会、2009年。

『日本サウディアラビア協会報』223号、日本サウディアラビア協会、2010年。

Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae, vol. 62 no. 3-4, Akadémiai Kiadó, 2009.

Bulletin of the School of Oriental & African Studies, vol. 73 no. 1, School of Oriental & African Studies (SOAS), London, 2010.

Journal of the American Research Center in Egypt, vol. 44, American Research Center in Egypt, 2008.

Newsletter, no. 4, Kyoto University, Global COE Program, 2009.

Newsletter, no. 80, Research Centre for Islamic History, Art and Culture (IRCICA), Organisation of the Islamic Conference (OIC), Istanbul, 2010.

Perceptions: Journal of International Affairs, vol. 13, no. 3, Center for Strategic Research (SAM), 2008.

事務局より

2009年度の会計の締め、第26回年次大会の準備と、3月末から5月にかけて目まぐるしい日々を送ってまいりました。一息ついたところで、ニューズレター原稿の作成と7月17日に東北大学で開催される公開講演会「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム—中東に誕生したアブラハムの宗教」の準備に係わっております。日本中東学会事務局の仕事をお手伝いさせて頂いてから1年が経ちますが、年中行事に事欠かず、

季節を感じる機会が増えたような気がします。また、事務局長補佐の仕事をして初めて、理事を担当されている先生方を始めとして多くの会員の献身的な努力で日本中東学会が運営されていることを知りました。

本学会ではメーリングリストによるメール配信が行われており、研究会・催しや学会からのお知らせに利用しております。メールアドレスを学会に登録しているにもかかわらず、お知らせ等がここ数ヶ月届いていない場合には、アドレスの不具合によるものと思われます。お手数をおかけしますが、配信可能なメールアドレスを事務局宛にお知らせ下さい。同時に、名簿へのメールアドレス掲載可否についても、お知らせいただければ幸いです。

6月より事務局の体制に一部変更があり、まだ不慣れな点も多く、会員の皆様にご迷惑をおかけすることもあろうかと存じます。今後とも、温かく見守って頂ければ幸いです。
(貫井万里 深見奈緒子)

編集後記

ニューズレター120号、121号ともに、ギョーカイ用語でいう「ケツカッチン」、すなわち発行日を後ろにずらすことのできない状況で出さねばならず、カレンダーを睨みながら綱渡りの編集作業となった。

会員、そして理事の片手間での学会運営には、そろそろ限界がきているのではないかと思うことがしばしば。とはいえ、学会専任の人を雇う経済基盤がない。あと会員が200名増える・・・？賛助会員が現れる・・・？どこかから打開策が降ってこないかなあ。

(山岸智子)



会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2011 年度およびそれ以前の会費に未納がある方は、本号のニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。AJAMES に未送付分がある場合は、2010 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。また、京都大学における年次大会での研究発表や AJAMES への論文投稿を予定されている会員の方は、是非とも会費納入を宜しくお願い申し上げます。請求会費額は 2010 年 6 月末日の振込確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

日本中東学会ニューズレター 第121号

発行日 2010年7月1日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町 513 番地
早稲田大学 120-4 号館 3 階
早稲田大学イスラーム地域研究機構気付
日本中東学会事務局
電話/ファクス：03-5286-1966
Eメール: james@db3.so-net.ne.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>
郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店(普)5346808
(日本中東学会 代表 長沢 栄治)